ルーミーとイラン現代詩
ルーミーとマスナヴィ

〔CONTENTS〕

■現代詩手帖　2026年2月号』
【特集】イラン現代詩を読む
（思潮社　2026.2）
「ギャルース・アブドルマレキャーン
シャフラーム・パールサーモトラグ（聞き手）
インタビュー（中村菜穂訳）
詩の方法――この世界を照らすための」

■詩人のプロフィール及び作品について
（英語での各種ネット検索より）
・ソフラーブ・セペフリー
・フォルーグ・ファッロフザード
・アフマド・シャームルー
・ニマ・ユーシジ
・ギャルース・アブドルマレキャーン

■13世紀のペルシャの神秘詩人
ジャラール・ウッディーン・ルーミーと
詩集『マスナヴィー』について

■ジャラール・ウッディーン・ルーミー
詩集『マスナヴィー』より

①序詩「葦の歌」（第一巻より）
②「八百屋と鸚鵡の物語」（第一巻より）
③「老いたハープ奏者（The Harper / 老楽師）の物語」（第一巻より）
④「ぶどうをめぐる四人の争い」（第二巻より）
⑤「新月を見たと思い込んだ者」（第二巻より）
⑥「スーフィーのロバ」（第二巻より）
⑦「暗闇の中の象」（第三巻より）
⑧「マールギールと凍った蛇」（第三巻より）
⑨「悪人のために祈った説教者」（第四巻より）
⑩「染色桶に落ちたジャッカル、孔雀を装うこと」（第四巻より）
⑪「師を盲目的に真似た弟子」　「二度笑う耳の聞こえぬ男」（第五巻より）
⑫「香油と麝香の匂いに気絶した革なめし職人の物語」（第四巻より）
⑬「賢者と孔雀」（第五巻より）
⑭「アレッポの詩人の叱責」（第六巻より）
⑮「鳥と鳥刺し」（第六巻より）

■『現代詩手帖　2026年2月号』
【特集】イラン現代詩を読む
（思潮社　2026.2）
「ギャルース・アブドルマレキャーン
シャフラーム・パールサーモトラグ（聞き手）
インタビュー（中村菜穂訳）
詩の方法――この世界を照らすための」

■詩人のプロフィール及び作品について
（英語での各種ネット検索より）
・ソフラーブ・セペフリー
・フォルーグ・ファッロフザード
・アフマド・シャームルー
・ニマ・ユーシジ
・ギャルース・アブドルマレキャーン

『現代詩手帖　2026年2月号』でイランの現代詩の特集が組まれている。

イランといえば、やはりスーフィズム（イスラム神秘主義）の代表的な人物
13世紀の詩人・神秘主義者のルーミー（1207-1273）で、
特に『マスナヴィー』や『シャムスの詩集』は、
神の愛、精神的な統一、自己超越といったテーマを扱い、
ペルシャ語文学の基盤を形成し、
現代のイラン詩（現代ペルシャ詩）に深い影響を与えている。

現代のイランについては不案内でしかもその詩の現在となるとまったく知らずにいた。
（イランの言語についても同様である）

今回の特集でその一端を知ることになったのだが、
イランでは、ルーミーは国民的な文化的遺産として崇敬され、
詩の伝統が日常生活や社会に根付いている中で、
その影響は神秘主義的な深みが
現代詩の表現にも深く影響を与えているという。

今回の特集を機に、
現代詩へのルーミーの影響について調べてみたところ、
現代詩手帖の特集記事では詳しくとりあげられていないが、
ネット上の情報からわかるのは次のような点である。

まず、テーマ。

ルーミーの『マスナヴィー』は、寓話を通じ
神秘主義を語る枠組みを確立し、
これが現代の叙事詩や内省詩に影響を与えていて、
神の愛、存在の統一、精神的な旅などの概念が、
現代詩人の作品に反映され、
感情の深さと哲学的探求について、
現代の詩人が内省や人間存在の問いを扱う基盤を提供している。

また、文化的・社会的文脈においては、
イランでは詩が政治や社会変革のツールとして機能しているといい、
ルーミーの教えは、イスラム改革派の思想家にも影響を与え、
詩を通じて社会的な再生や知的復興を促す形で
現代にも生きているところから、
現代イラン詩は、20世紀の自由詩の革新で古典形式から離れたものの
ルーミーの精神性はこれを補完する形で残っていいるという。

とはいえ、西洋でのルーミーの影響とは異なって、
イランではイスラム的文脈が強く保たれ、現代詩人は、
ルーミーの神秘主義を社会問題や個人主義に適応させているという。

イランの現代詩は、
Pahlavi王朝時代（1925-1979）からイスラム革命後（1979-）にかけ、
政治的抑圧や西洋影響を受けつつ展開してきたが、
特にルーミーの影響を受けている詩人は、

まずソフラーブ・セペフリー(1928-1980)。

詩集『東の悲しみ』や『水の足音』では、
ルーミーの『シャムスの詩集』から
リズム、内韻、内容（存在の統一、精神の旅）を借用している。

セペフリーは「現代の神秘主義者」と呼ばれていて、
自然や存在の合一をテーマに、
ルーミーの汎神論的視点を現代的に再解釈。
ルーミーのような「自己の消滅（ファナー）」と
「神との合一（バカー）」を象徴的に描き、
仏教や西洋神秘主義とも融合させ、
イラン人の精神性を現代の疎外感や自然とのつながりに結びつけている。

続いて、フォルーグ・ファッロフザード (1935-1967)。

イラン初ともいえる女性詩人で、
フェミニズムと個人的解放をテーマにした詩集『もう一つの誕生』では、
ルーミーの同名詩と共通の「再生」のモチーフを共有している。

ファッロフザードは、スーフィの伝統を再考し、
地上の愛や女性の主体性を強調するが、
ルーミーの神秘主義を「鏡の魂」のイメージで批判的に用い、
自己発見のプロセスを描き、ルーミーの影響を受けながらも、
伝統的な神中心から人間中心へシフトしている。

そしてアフマド・シャームルー (1925-2000)。

ルーミーの影響は間接的なものだといえるが、
社会主義的・革命的な詩人として知られ、

ルーミーを「奇跡の人物」と評価し、
ペルシャ詩の伝統を革新する中で、
神秘主義を人文主義的に再構築している。

これらの詩人たちは、
ニマ・ユーシジ（1897-1959）の影響で形式を革新しつつ、
ルーミーの精神性を基盤に、
現代のイラン社会（革命、ジェンダー、疎外）を反映している。

ニマ・ユーシジは、
イランの現代詩の父として知られる革新的な詩人とのことで、
伝統的なペルシャ詩の厳格な形式を打破し、
自由詩を導入することで、ペルシャ文学に革命をもたらし、
その影響から多くの現代詩人
上記のソフラーブ・セペフリーや
フォルーグ・ファッロフザードなどが
そのスタイルを継承・発展させたそうです。

さて『現代詩手帖』には、
イラン現代詩の新世代を代表する詩人
ギャルース・アブドルマレキャーンへの
「詩の方法――この世界を照らすための」
というインタビューが掲載されている。

アブドルマレキャーンは、1980年、
イラン革命直後のイラン・イラク戦争勃発直後に生まれ、
伝統的なペルシャ詩の形式を離れ、
自由詩（現代ペルシャ詩の流れ）を基調にしながら、
政治的抑圧や社会の傷を間接的に、
しかし強く表現する詩人として注目されているという。

そのインタビューには、アブドルマレキャーンが
時代状況に反応してきたにもかかわらず、その詩には直接的な社会的・政治的変化が
表現されていないことについての聞き手からの質問に次のように答えているところがある。

「詩は抗議について語ることなく抗議の詩である場合があります。
詩は政治について語ることなく政治的である場合があります。
詩はコミットメントの詩という一般的な枠組みに当てはまることなく、
読者をコミットメントへと導くことはあり得ます。」

「いずれにせよ、この態度は究極的に、芸術は真に芸術である限り、それが何を語ろうとも、
より良い世界を創造できると信じるものなのです。」

「詩には読者の思考の感受性を高めるという役割があり、
さまざまな状況において、読者自らがより活発な想像力によって、
そうした外部からの教えをより広く深く享受することができるようにするものです。
知性が分節化するのとは異なり、想像力は組み合わせるのです。
それが人間に、多くの関係性を発見し、さまざまな異なる空間を繋ぐ力を与えます。

さまざまな異なる世界を知っていれば、
それれを比較して適切な状況で、ある世界のメカニズムを、
別の世界を分析するために用いることができるのです。」

個人的にも詩的な表現に限らず、「声をあげる！」といったような直接的なベタなコミットメントよりも、
想像力を賦活させるような言葉を好ましく思っているので、
このアブドルマレキャーンの言葉は刺さるものがある。

さて、『現代詩手帖』には
オマル・ハーヤームやルーミー、ハーフェズから現代までの
「ペルシア詩アンソロジー」、そして
ソフラーブ・セペフリーとフォルーグ・ファッロフザードの小詩集が掲載されているが、

ここではそれは『現代詩手帖』上にはない、
アブドルマレキャーンを含む上記でとりあげた詩人たちの詩（英語に訳されたもの）から
拙訳で紹介することにしたい。

●ソフラーブ・セペフリー

水の流れ（The Flow Of Water）

知識が
まだ泉のそばに巣くっていた頃
人は
青い哲学に耽溺し
草原の繊細な怠惰の中で

彼の思考は鳥とともに飛び
木々とともに息をし
ケシの条件に従順だった

水の大胆な意味が
彼の言葉の深みで咆哮した

人は
元素のテキストの中で眠り
夜明けの恐怖の中で目覚めた

しかし時折
成長の奇妙な音楽が
彼の喜びの脆い関節に響き
埃が
彼の苦闘する膝に積もった

すると
彼の創造的な指は
怠惰になり
正確な幾何学的な悲しみの中に迷い込んだ

●フォルーグ・ファッロフザード

結婚指輪（The Wedding Band）

少女は微笑んで言った：
この金の指輪の秘密は何？
この指をこんなにきつく抱きしめる指輪の秘密は、
この輝き、きらめくバンドの秘密は何？

男は驚いて言った：
それは幸運の指輪、命の指輪だ。

皆が言った：おめでとう、幸せに！

少女は言った：ああ、
その意味についてまだ疑いがあるなんて。

年月が過ぎ、ある夜
落ち込んだ女がその金のバンドを見つめ
その輝く模様の中に見たのは
夫の忠誠を望んで無駄に過ごした日々、
完全に無駄になった日々だった。

女は激しく動揺し、叫んだ：
ああ、このまだ輝き、きらめく指輪は
奴隷と隷属のバンドなのだ。

●アフマド・シャームルー

愛おしく（Lovingly）

「愛してる」と言う者は
歌を失った悲しみの吟遊詩人だ。

愛に
語る舌があればいいのに。

千羽の幸せなヒバリが
あなたの瞳の中で飛び、
千羽のカナリアが
私の喉の中で黙り込む。

愛に
語る舌があればいいのに。

「愛してる」と言う者は
夜の青い心臓で、
月光を探している。

愛に
語る舌があればいいのに。

千の笑う太陽が
あなたの足跡に、
千の泣く星が
私の欲望に。

愛が
語ることができればいいのに。

●ニマ・ユーシジ

夜である（It Is Night）

深い闇の夜。
古いイチジクの木の枝に
カエルが絶え間なく鳴き
嵐を、洪水を予告し
私は恐怖に溺れている。

夜である、

そして夜とともに世界は
墓の中の死体のように見える。
恐れの中で私は自分に問う
「もし豪雨が至る所に降り注いだら？」
「もし雨が止まず
大地が小さな舟のように
水の中に沈むまで続いたら？」

この恐ろしい闇の夜に

誰が言えるだろう
夜明けが来たとき
私たちがどんな状態になっているかを。
朝の光は
嵐の恐ろしい顔を
消し去ってくれるのだろうか？

●ギャルース・アブドルマレキャーン

バムの廃墟

2003年の地震で破壊されたバムの街に捧ぐ

窓は黒い
テーブルは黒い
空は黒い
雪は黒い

あなたは間違っている！
私は薬も必要ない
精神科医も必要ない。

ただこの石をどかして、
土を払いのけて、
私の目を見てくれ！

私の目
地球のように丸い目

世界の姿
閉ざされた扉の世界
無数の壁の世界

鏡の前に立つたび
逆さまの亀の姿が映り
通りすがりの誰かが来て
世界をひっくり返してくれるのを待ち望むある夜
この孤独のあまりに
私たちの手は震え
キャンバスに描かれた私たちの姿は
消し去られるだろう

バムの廃墟が消し去られる
私たちが建てた避難所が
私たちの頭上に崩れ落ちる

この詩の次のイメージに私は怯えている
神がすべての扉を肩に担ぎ
去っていくイメージ
遠くへ、そしてさらに遠くへ退いていく

私は書く：いつか
失われた鍵は見つかるだろう。
失われた錠前については、どうすればいいのか。

■13世紀のペルシャの神秘詩人
　ジャラール・ウッディーン・ルーミーと
　詩集『マスナヴィー』について

先日、『現代詩手帖　2026年2月号』の特集「イラン現代詩を読む」をとりあげた（mediopos4113/2026.2.20）ところでもあり、ルーミーの紹介方々、その詩集『マスナヴィー（Masnavi-ye Ma’navi）』を紹介していきたい。
（『現代詩手帖』の特集では、「ペルシャ詩アンソロジー」に『マスナヴィー』の序章に置かれてある「葦笛の詩」の部分訳が掲載されている）

ルーミー（Jalāl al-Dīn Muḥammad Rūmī、1207年9月30日生まれ – 1273年12月17日没）は、ペルシア語圏で最も偉大な神秘詩人・スーフィー（イスラーム神秘主義）のひとり。現在でも世界中で最も広く読まれている詩人の一人であるにもかかわらず、日本でまとまって紹介されているのは井筒俊彦訳の『ルーミー語録』（親しい門弟や訪問客に対して語った言葉を記録した散文）くらいで、その最も有名な詩集『マスナヴィー（Masnavi-ye Ma’navi）』もまとまって読めるものは見当たらない。

まずルーミーの簡単な紹介から。

・ルーミーの生涯について

ルーミーは、ペルシャ（現在のアフガニスタンやイラン地域）のバルフ生まれ。幼少期に家族とともにモンゴル侵攻を逃れてアナトリア（現在のトルコ）のコニヤに移住する。父は著名な学者で、ルーミー自身もコーラン、神学、哲学、伝承学の大家として知られていたが、神秘主義（スーフィズム）に傾倒。特に、托鉢僧シャムス・タブリーズィーとの出会いが転機となり、詩人としての創作活動を本格化させた。ルーミーはマウラウィー教団（旋回舞踊で知られるスーフィー教団）の創始者としても有名で、その教えは宗教の枠を超えた普遍的な愛と神との合一を強調したものである。

・托鉢僧シャムスとの出会いについて

なお、ルーミーの生涯と創作活動において決定的な転換点ともなり、その神秘主義的体験の核心ともいえる重要な托鉢僧シャムスとの関係についてふれておきたい。

ルーミーは1244年頃（37歳頃）、アナトリアのコニヤで放浪の托鉢僧シャムスと出会う。シャムスは当時約60歳の老練なスーフィー（神秘主義者）で、厳格で苛烈な性格を持ち、従来の形式的な宗教教育を批判。神への直接的な愛と合一（ファナー）を求める実践を重視していた。ルーミーはそれまで一流の神学者・法学者として知られ、父の後を継いで多くの弟子を抱え、伝統的な講義を行っていたが、その出会いが彼の人生を一変させることになる。

ルーミーとシャムスの関係は、単なる師弟関係ではなく、魂の鏡像や神の顕現を通じた愛の体現であり、ルーミーはシャムスを「神の光の鏡」として見なし、シャムスを通じて神の愛を直接体験したという。シャムスはルーミーにとって「神の代理人」や「神の友」であり、シャムスへの愛は神愛（神への恋慕）の象徴となったのである。

その出会い後、ルーミーはシャムスに没頭。家族や弟子たちを顧みず、日夜シャムスと語り合い、神秘的な体験に浸るようになったが、弟子たちはこれを嫉妬し、シャムスを疎んじるようになる。

そしてシャムスは1247年か1248年頃、突然姿を消してしまうのだが、（殺されたという説、追放された説、自ら去った説など諸説あり）この喪失の痛みが、ルーミーの詩作の爆発的な原動力となり、そのの別離

後、この喪失感を詩に昇華させ、『シャムス・タブリーズ詩集』（Dīwān-e Shams-e Tabrīzī）と呼ばれる膨大な抒情詩集を生み出した。この詩集はシャムスの名を冠しつつ、実質的に神への愛の歌として読まれている。

しかしその『シャムス・タブリーズ詩集』は「陶酔の詩」だといえるが、『マスナヴィー』や『ルーミー語録』は「反省の詩」として区別されている。シャムスとの出会いによる「陶酔」がルーミーの初期の熱狂を生み、後年の作品ではそれを醒めた意識で反省的に再構成しているというのである。（ちなみに、『シャムス・タブリーズ詩集』については未読）

・『マスナヴィー』について

さて、『マスナヴィー』（Mathnawi または Masnavi-ye Ma'navi、「精神的対句」の意）だが、それはルーミーのの最高傑作といわれ、生涯の後半（おおよそ1258–1273年）にペルシア語で書かれた、約25,000行に及ぶ壮大な6巻の叙事詩。イスラーム世界の崇敬者たちからはしばしば「ペルシア語のコーラン」と呼ばれ、スーフィーの霊性の包括的なガイドともなっている。その詩は、寓話、逸話、コーラン解釈、日常の物語、寓話、そして直接的な神秘的教えを融合させていて、ルーミーはこれらの物語的手法を、線形的な物語としてではなく、霊的な洞察を喚起するために用いていて、しばしば詩のなかで物語を中断して反省を挿入し、精神の深みに迫っている。

『マスナヴィー』は6巻からなりしばしばテーマ的に対になるように以下のようにグループ化されている。

第1–2巻：
主にナフス（下位の肉欲的な自己、すなわちエゴ）に焦点を当て、その自己欺瞞、悪しき傾向、そしてそれを制御または超越する必要性を扱う。

第3–4巻：
理性と知識を中心に据え、しばしば預言者モーセのような人物（コーランや聖書的故事から借用）を通じて具現化され、知的理解の限界と霊的洞察の対比を探求する。

第5–6巻：
肉体的な/地上の存在を否定または超越することを強調し、神の現実の本当の理解と究極の合一に至ることを目指す。

それらで詠われるテーマは、スーフィー神秘主義と魂の神への旅を中心に主に以下の通り。

1．神聖な愛（'Ishq）

作品全体の中心的な駆動力。ルーミーは愛を、真理と神との合一への究極の道として描いている。人間的な愛（他者への愛）は、神聖な愛の反映または梯子である。愛は変容させ、浄化し、分離を克服する。
第1巻の有名な冒頭にある「葦の歌」は、魂が神聖な起源から切り離されたことによる渇望と痛みを象徴。葦笛が葦の茂みから離れたことを嘆くように描かれ、渇望、分離、再会のテーマが繰り返し現れ、愛は「心への手術」や地上における神の代理者として描写されている。

2．魂の旅と神への帰還

『マスナヴィー』は人間存在を、魂が神の起源からの追放と帰還への渇望として枠づけているが、これは魂の永遠以前の契約と物質世界への降下を反映している。物語では、分離の痛みと再会の喜びが描写され、霊的成長が故郷への帰還として描かれている。

3. エゴ（ナフス）の超越と自己実現

エゴは主要な障壁となり、欺瞞的で貪欲で、幻想に執着するが、ルーミーは「死ぬ前に死ぬ」（偽りの自己を消滅させる）ことを教え、より高い意識に至るために必要だと説く。これには自己認識、謙虚さ、そして「心の鏡」を磨いて神の光を映すことが含まれる。そうしたことが、多くの寓話によって、ユーモラスにまたは鋭く、エゴ駆動の愚かさが暴露されている。

4. 存在の合一（Wahdat al-Wujud）と形を超える視野

すべてが神を顕現しているとされる。恋人と愛される者（神）は究極的に一つであり、見かけの「恋人」はヴェールに過ぎない。ルーミーは読者に、外面的な形（文字通りの解釈、世俗的執着）を超え、内面的な意味と見えない現実を見るよう促す。そうすることで寛容が生まれ、愛によって浄化されたすべての道が同じ真理に至るとされている。

5. 霊的変容と内面的浄化

『マスナヴィー』の詩は「開かれた心臓手術」として機能し、道徳的・倫理的生活、禁欲的鍛錬、忍耐、降伏、覚醒のためのガイドとなる。過度な知性主義、文字通りの解釈、世俗的名声などを退け、直接的な経験と愛駆動の変化を優先している。

6. スーフィー的叡智を伴う道徳的・倫理的教訓

謙虚さ、寛大さ、無執着などの美徳と、貪欲、嫉妬、傲慢などの悪徳に関する実践的な教えが織り込まれている。これらはしばしばコーランの物語、ハディース、日常生活から引き出される。ルーミーはユーモア、皮肉、生々しいイメージを用いながら、それらに深みを与えている。

なお、原文のペルシャ語はまったく解せないこともあり、上記の解説も含め、英語訳を参照しながらの紹介である。

『マスナヴィー』をまとまって読むことのできる英語テキストは、完全訳のReynold A. Nicholsonによる古典的な英訳（1925–1940頃）やE.H. Whinfieldの英訳（抜粋）、Coleman BarksのThe Essential Rumiによる現代訳（独自の訳で人気だという）などがあり、日本語でも抄訳・部分訳などがオンラインで公開されたりもしているが、ここでは全6巻の完全訳であるReynold A. Nicholsonの英語テキストをもとにして紹介する（オンラインで無料公開されているテキスト）。

■詩集『マスナヴィー』

①序詩「葦の歌」（第一巻より）

これは先日mediopos4113（2026.2.20）でとりあげた、『現代詩手帖　2026年2月号』「特集　イラン現代詩を読む」の「ペルシア詩アンソロジー」でも、その簡略版が掲載されていたが、これはその完全版。
『マスナヴィー』第1巻の冒頭に位置する「葦の歌」は、スーフィー文学で最も有名で象徴的な部分の一つ。
この詩は約35行（付されている番号は原文の詩の行）で、『マスナヴィー』全体のテーマを凝縮した序曲となっている。
ルーミーはここで、葦笛（ネイ）を人間の魂のメタファーとして、神聖な起源からの分離と、再会への渇望を歌っている。

〈葦の歌〉

神の慈悲深く、慈愛あふれる御名において

1. 葦の笛の声を聴け　いかに語るか
　別離の嘆きを　葦原から引き離されて以来
　男も女も　私の嘆きに共に泣く
　私は裂かれた胸を求めている
　そこにこそ　愛の渇望の痛みを　語り明かしたい

5. 源から遠く離れた者は誰でも
　かつて一つであった時を　恋い慕う
　どんな集まりでも　私は悲しみの調べを奏でた
　不幸な者と喜ぶ者と　共に座した
　誰もが自分の思いで　私の友となった
　だが　私の内なる秘密を探ろうとする者は　一人もいない

　私の秘密は　嘆きの声から遠くない
　けれど耳も目も　それを捉える光を欠いている
　からだは魂を隠さず　魂もからだを隠さない
　それでも　魂を見ることは　誰にも許されていない

10. この葦の音は　風ではなく　火である
　この火を持たぬ者は　無に帰せよ
　葦の中にあるのは　愛の炎
　葡萄酒の中にあるのは　愛の熱情

　葦は　友から引き離された者の友だ
　その調べは　私たちの心を貫いた
　毒と解毒薬を　同時に持つものを　葦以外に誰が見たか
　同情し　恋い焦がれる者を　葦以外に誰が見たか

　葦は　血に染まった道を語り
　マジュヌーンの情熱の物語を語る
　この意味は　無知な者にしか　託されない
　舌に客は　耳のほか　いない

15. 私たちの悲しみの中で　日は季節を失った
灼熱の悲しみと　手をつないで　日は進む
もし日々が去るなら　去れ　構わない
ただ　汝だけは　留まれ　汝ほど聖なる者は　いない

魚でない者は　汝の水に飽きる
日々の糧なき者は　一日を長く感じる
生のままの者は　熟れた者の境地を理解しない
だから　私の言葉は　短くせねばならない
さらば おお子よ　鎖を断ち切れ　自由になれ
いつまで　銀と黄金の奴隷でいるのか

20. 海を　水差しに注いだら　どれだけ入るか
一日分の量だけだ
貪欲な者の目は　決して満ちない
真珠で牡蠣の殻が満たされるのは　満足したときだけ
愛によって　衣を裂かれた者だけが
貪欲と　すべての欠陥から　清められる

おお　私たちに善き収穫をもたらす愛よ　万歳
すべての病の医師よ
傲慢と虚栄の薬よ
私たちのプラトンであり　ガレノスである

25. 愛によって　土のからだは　天に昇った
山は踊り出し　軽やかになった
愛がシナイ山に息吹きかけた　おお恋人よ
シナイは酔い　モーセは気を失った

もし　私と心通う者の唇に　私が結ばれたなら
葦のように　語れるすべてを　語るだろう
だが　同じ言葉を話す者から離れた者は
百の歌を持っていても　黙ってしまう

薔薇が去り　庭が色褪せたら
もう　夜鶯の物語は　聞こえない

30. 愛される者は　すべてであり　恋する者は　ただのヴェール
愛される者は生き　恋する者は　死んだもの
愛が彼を顧みなくなれば
翼なき鳥のように　取り残される　ああ　哀れ

私の愛する者の光が　前にも後ろにもないなら
私は　前も後ろも　どうして意識できよう
愛は　この言葉を　現わしたいと欲する
鏡が映さぬなら　それは　どういうことか
お前の魂の鏡が　何も映さぬのは　なぜか知るか

　顔の錆を　拭い去っていないからだ

※「マジュヌーン」（Majnun / مجنون）
アラビア語で「狂った人」または「（愛に）狂おしい人」

○〈葦の歌〉について

「葦の歌」は全6巻のテーマである、エゴの超越、神への帰還、愛の変容、合一を予示し、
単なる詩ではなく、スーフィー修行の地図となっている。

1．葦笛（ネイ）の象徴

葦は元々、湿地の仲間たちと一体だった。

切り取られ、空洞にされ、穴を開けられ、息を吹き込まれて初めて「音」を出すようになる。
これは人間の魂の物。神（起源）から物質世界に「切り離され」、エゴ（nafs）の空洞を生み、神の息（霊的な霊感）によって初めて真の「歌」（霊的表現）を発するものとされる。
スーフィーでは「死ぬ前に死ぬ」（エゴの消滅）が鍵となっていて、葦が切られ空洞になるように、自我を空にして神の息を受け入れることになる。

2．分離（firaq）と渇望（ishq）の痛み

冒頭の「分離の嘆き」は、スーフィーの核心テーマであり、魂は神との永遠の契約で結ばれていたが、物質界に「落ちて」分離した。　その痛みが「音楽」となり、苦しみが芸術・詩・霊性に昇華される。

「胸を裂かれた心だけが理解する」というのは、
真の霊的理解は、頭ではなく、心の傷（開かれた心）から来るということ。

3．火と愛の炎

「音は火から、風からではない」というのは、
単なる息（風）ではなく、愛の炎（'ishqの火）が葦笛を鳴らす。

愛は「手術」であって、魂を焼き尽くして浄化する。
それがなければ、人生は無意味となる。

4．普遍性と秘密

葦笛は喜びも悲しみも共有するが、「秘密」を聞くのは「愛の火で煮られた者」だけ。
これはスーフィーの秘教的な側面であり、表面的な楽しみではなく、内面的な洞察が必要だいうことを暗示している。

■詩集『マスナヴィー』

②「八百屋と鸚鵡の物語」（第一巻より）

mediopos4127（2026.3.2）では、
序詩の「葦の歌」をとりあげた。
以後、第1巻から第6巻のなかの有名な歌を随時とりあげながら、
宗教的な教訓めいたところはあるものの、
それについて若干の解説を付していくことにしたい。

今回は「葦の歌」に続いて、
同じく第1巻から「八百屋と鸚鵡の物語」。

本来はこの「八百屋と鸚鵡の物語の前に、
王の医師による金細工師の殺害が、
神の啓示による正当な行為であることを擁護する寓話がある。
ずいぶん長いのでとりあげることはできないが、
その文脈で、聖人の行動を俗人の視点で判断する愚かさを風刺している。

・物語

主人公は八百屋。彼は甘い声で話す緑色の鸚鵡を飼っているが、
この鸚鵡は、店主の留守中に店を守り、
商人たちに上手に話しかけたり、鸚鵡らしい歌を歌ったりする賢い鳥。

ある日、鸚鵡がベンチから飛び立ち、バラ油の瓶をこぼしてしまう。
店主が帰宅し、ベンチが油まみれで服が汚れているのを見て怒り、
鸚鵡の頭を叩いたことで、鸚鵡は禿げ頭になり、
数日間言葉を発しなくなる。

店主は後悔し、溜息をつき、髭を裂きながら
「繁栄の太陽が雲に隠れた」と嘆く。
彼はダルヴィーシュ（スーフィーの修道者）たちに贈り物をし、
鸚鵡の言葉を取り戻そうとし、
三日三夜、絶望的にベンチに座り、
鸚鵡にさまざまな驚異を見せて言葉を促す。

その時、頭を剃った禿げ頭のダルヴィーシュが通りかかるが、
鸚鵡はこれを見て再び話し始め、ダルヴィーシュに
「おい禿げ！ お前も瓶から油をこぼしたのか？」と叫ぶ。

傍観者たちは鸚鵡の推論に笑う。
鸚鵡はダルヴィーシュの禿げ頭を、
自分の禿げ（油こぼしの罰）と同類だと勘違いしたのである。

・寓話の教訓

ルーミーは、鸚鵡の誤った類推を例に、

「聖人の行為を己の基準で測るな」と警告する。
たとえ外見が似ていても
（例:「獅子（shér）」と「乳（shír）」の綴りが似ているように）、
本質は異なっている。

この物語の核心は、
「外見の類似に惑わされず、内面的差異を見抜け」
というスーフィーの教えである。

ルーミーは「魔法と奇跡の差」（モーセの杖 vs. 魔術師の杖）を挙げ、
外見が似ていても、神の慈悲 vs. 呪いの結果が異なることを強調。

真の信者（ムーミン）は本質が純粋で、神の愛を生む。
一方、偽善者は外見だけ似せ、争いや嫉妬を生む。
名前の味（地獄の苦さ vs. 喜び）は、内面的本質を表す。

猿の比喩：猿は人間を真似するが、理解せず争うだけ。
偽善者は礼拝を真似るが、祈りではなく争いのため。

偽金と純金を区別する試金石は、
霊的味覚（洞察力）を象徴している。
それは神が魂に与えるもので、確信と疑いを分ける。
世俗の感覚は「この世の梯子」だが、
宗教の感覚は「天の梯子」である。

霊的道は体を「破壊」（ファナー、自我の消滅）するが、
その後「繁栄に返す」（バカー、神の中での存続）。

この物語は、外見に惑わされず本質を見よということを
ルーミーらしい日常のエピソードから神秘へ昇華させることを
ユーモラスに伝えている

以下、寓話を意訳。

②「八百屋と鸚鵡の物語」（第1巻より）

八百屋と鸚鵡の物語、鸚鵡が店で油をこぼしたこと。

八百屋に鸚鵡がいた、甘い声で話す緑の鸚鵡。
ベンチに止まり、店主の留守に店を守り、
商人たちに上手に語りかけた。
人間に語るときは人間のように話し、
鸚鵡の歌にも長けていた。

一度、ベンチから飛び立ち、
バラ油の瓶をこぼした。
主人は家から帰り、商人らしくベンチに悠然と座った。

ベンチは油で満ち、服は脂ぎった。
彼は鸚鵡の頭を叩き、禿げさせた。

数日、鸚鵡は言葉を発さず、
八百屋は悔い、深く溜息をついた。
髭を裂き、「ああ、我が繁栄の太陽は雲に隠れた。
その時、手が折れていたら！
どうしてあの甘い声の者に頭を打ったか？」

彼はすべてのダルヴィーシュに贈り物をし、
鳥の言葉を取り戻さんとした。
三日三夜後、彼はベンチに座り、
乱れ、悲しみに満ち、絶望の如く。
鳥にさまざまな驚異を見せ、
もしかしたら言葉を発するかと。

その時、頭を剃ったダルヴィーシュが通りかかった、
ジャウラーク（粗い毛織の衣）を着、
頭は鉢や盆の外側のように禿げていた。
そこで鸚鵡が話し始め、ダルヴィーシュに叫んだ

「おい、奴！
どうして禿げと混じったか、おい禿げ！
お前も瓶から油をこぼしたのか？」

傍観者は鸚鵡の推論に笑った、
衣を着た者を自分と同じと思ったから。
聖人の行為を己の基準で測るな、
たとえ「獅子（shér）」と「乳（shír）」が似ていても。

このゆえに全世界は迷い、
神の代行者（アブダール）を理解する者は稀なり。
彼らは預言者と平等を主張し、
聖人を自分と同じと思った。

「見よ、我らは人間、彼らも人間。
我らも彼らも眠りと食に縛られる」と。
盲目ゆえに、無限の差を見抜けなかった。

同じ場所から食い飲みする二種の蜂、
片方は刺を生み、片方は蜜を生む。
同じ草を食い、同じ水を飲む鹿、
片方は糞を生み、片方は純粋な麝香を生む。

同じ水源から飲む葦、
片方は空、片方は砂糖で満ちる。
何万もの類似を観よ、
二者の距離は七十年旅の遠さなり。

片方は食べて汚物を排出し、
片方は食べて神の光そのものとなる。
片方は食べて貪欲と嫉妬を生み、
片方は食べて唯一なる神への愛を生む。

片方は良き土、片方は塩辛く悪い土。
片方は美しい天使、片方は悪魔と野獣。
外見が似ていても当然、
苦い水と甘い水は同じ清らかさを持つ。

誰が知るか、霊的味覚を持つ者以外に？
彼を探せ、彼は塩水と甘水を区別する。
魔法と奇跡を比べ、欺瞞と思う愚か者。
モーセの時代の魔術師は争いのため、
彼の杖のように杖を上げた。

だがこの杖とあの杖の間には大いなる差、
この行為（魔法）からあの行為（奇跡）へは遠い道。
この行為は神の呪いを受け、
あの行為は神の慈悲の報いを受ける。

不信仰者たちは預言者・聖人と争い、猿の性質を持つ。
悪しき性質は胸の癌なり。
人がするものを、猿は毎瞬真似る。
「彼のようにした」と考え、争う顔の者は差を知らぬ。

片方は神の命令で行動し、片方は争いのため。
争う顔の者たちに塵をかけよ！
その偽善者は、礼拝で真の信者と並ぶが、
祈りのためではなく争いのため。
礼拝、断食、巡礼、施しで、真の信者と偽善者は勝利と敗北を争う。

最後は真の信者に勝利、
偽善者には来世の敗北。
同じゲームに熱中しても、
互いに関して、メルヴの男とレイの男のように遠い。
各々は己の住処へ行き、名に従う。

真の信者と呼ばれれば魂は喜び、
「偽善者」と言われれば火に満ちる。
真の信者の名は本質ゆえに愛され、
偽善者の名は毒性ゆえに嫌われる。

（四文字の）ミーム・ワウ・ミーム・ヌーンは栄誉を与えず、
ムーミン（真の信者）の言葉はただ指示のため。
真の信者を偽善者と呼べば、
その卑しい名はサソリのように内を刺す。

この名が地獄から来ぬなら、なぜ地獄の味がする？

その悪名の汚さは文字からではなく、
海水の苦さは器からではない。
文字は器、意味は水のように入る。
意味の海は神にあり――彼にウンム・ル・キターブ（書の母）あり。
この世では苦い海と甘い海が分かれ、
間に障壁あり、互いに越えぬ。

両者は一つの源から流れ出ることを知れ。
両者を過ぎ、その源へ行け！
試金石なくしては、偽金と純金を判断できぬ。
神が魂に試金石を置く者、
確信と疑いを区別する。

生きる者の口にゴミが飛び込み、
吐き出してようやく安らぐ。
何千もの一口のうち、一つのゴミが入れば、
生きる者の感覚がそれを追う。

世俗の感覚はこの世の梯子、
宗教の感覚は天の梯子。
前者の健康は医師から求めよ、
後者の健康は愛する者から求めよ。

前者の健康は体の繁栄から、
後者の健康は体の破壊から。
霊的道は体を破壊し、破壊した後、繁栄に返す。
宝のために家を壊し、
その宝でより良く建て直す。

水を止め、川床を清め、
再び飲む水を流す。
皮膚を裂き、鉄の矢じりを抜き、
新鮮な皮膚が生える。
要塞を壊し、不信仰者から奪い、
そこに百の塔と城壁を築く。

比類なき者の行為を誰が語れよう？
私が言ったのは、今の必要が与えるものだけ。
時にはこう、時には逆に見える。
宗教の業はただ驚嘆のみ。

私が言う驚嘆とは、背を向ける驚嘆ではなく、
恍惚に溺れ、愛する者に酔う驚嘆。
片方の顔は愛する者に向き、
片方の顔は己の顔（自分に向く）。

皆の顔を長く見よ、注意深く見守れ。
スーフィーに仕えることで、真の聖人の顔を知るかも。
アダムの顔をした悪魔が多いゆえ、
すべての手に手を差し伸べるな。
罠師は鳥を誘うため笛を吹く、
同類の音を聞き、空から降り、罠と刃先に遭う。

聖人の業は光と熱、
卑しき者の業は策略と恥知らず。
彼らは乞食のため毛織の獅子を作り、
ブー・ムサイリムにアフマドの称号を与える。

だがブー・ムサイリムにはカッザーブ（嘘つき）の称号が残り、
ムハンマドにはウル・ル・アルバーブ（叡智ある者）の称号が残る。
神の酒、その封印は純粋な麝香、
他の酒、その封印は悪臭と苦痛。

〇用語に関する注釈

・ミーム・ワウ・ミーム・ヌーン
アラビア語の4つのアルファベット（M・W・M・N）を指していて、これらを繋げると「ムウミン（Mu'min / مؤمن）」という言葉になる。
スーフィズム（イスラーム神秘主義）において非常に重要な意味を持っている。
ムウミン（Mu'min）：一般的には「信者」や「信仰を持つ者」と訳されるが、アラビア語の語根「ア・マ・ナ（A-M-N）」に由来し、「安全である」「安心させる」「信じる」といった意味が含まれ、神（アッラー）の 99の美名の一つでもあり、その場合は「信仰を授ける者」「安寧を与える者」を意味する。
また、スーフィズムでは、単なる表面的な信仰を超えた、より深い精神性を表す象徴として扱われている。

・ファナーとバカー
スーフィズム（イスラーム神秘主義）における悟りのプロセスを表す、表裏一体の重要な概念。修行者が自己を滅ぼし、神と一つになるプロセスの二つの段階。ファナー（Fana）は「消滅」で、自分のエゴ（自我）、欲望、執着、さらには「自分という存在」そのものの意識が、神の圧倒的な存在の中に溶け去ってしまう状態を表す。
. バカー（Baqa）は「存続」で、ファナーを経て自己を滅ぼした修行者が、「神と共に生きる者」として再びこの世界に立ち返る状態を表す。

・メルヴの男とレイの男
「志（目的）が正反対であること」や「決して相容れない隔たり」を象徴する言葉として使われる。
メルヴ（現在のトルクメニスタン）とレイ（現在のイラン・テヘラン近郊）は、当時の中央アジアとイランを代表する主要都市であり、物理的に非常に遠く離れていた。この二つの地名を対比させ、外見は似ていても「内実や向かっている方向が全く異なる二人の人間」を表現している。一方は真実（神）を追い求め、もう一方は現世の利益や虚栄を追い求めているような状態を指す。

・ダルヴィーシュ
ペルシャ語で「門口に立つ者」、転じて「貧者（托鉢僧）」を意味する言葉で、スーフィズムにおいては、単に経済的に貧しい人ではなく、「神の前で自らの無力さを悟り、世俗的な執着を捨て去った修行者」を指す。

・ウンム・ル・キターブ
アラビア語で「啓典の母体」または「本の母」を意味する言葉で、ラーム全般、そしてスーフィズム（神秘主義）において、文脈により以下の3つの重要な意味を持っている。
まず、最も一般的な意味は、天上の「守護された平板（ロウフ・ル・マハフーズ）」に記されている、一切の変更がない永遠の神の言葉。
また、『クルアーン』の第1章である「アル・ファーティハ（開端章）」の別称でもある。
スーフィーたちの間では、より深遠な意味で使われていて、宇宙のあらゆる出来事や知識が書き込まれた「神の知識」そのものを指している。

・ブー・ムサイリム
預言者ムハンマドの時代に現れた「偽預言者」ムサイリマ（Musaylima）を指す蔑称。スーフィズムの文脈では、歴史的な人物という以上に、「エゴ（自我）の偽り」や「虚栄心」を象徴する代名詞として使われる。

・アフマド
預言者ムハンマドの天上における別名であり、スーフィズムにおいて極めて神秘的で重要な意味を持つ名前。

・カッザーブ
アラビア語で「稀代の嘘つき」「大嘘つき」を意味する言葉。スーフィズムの文脈では、単に日常の嘘をつく人ではなく、「魂の真実を偽る者」という極めて厳しい宗教的・精神的な意味を持つ。

・ウル・ル・アルバーブ
アラビア語で「核心（本質）を持つ者たち」、一般的には「思慮ある人々」「悟りを開いた人々」を意味する言葉。『クルアーン』に何度も登場する言葉だが、スーフィズムにおいては、単なる「知的な人」を超えた、より深い霊的な意味を持っている。

■詩集『マスナヴィー』

③「老いたハープ奏者（The Harper / 老楽師）の物語」（第一巻より）

「葦の歌」mediopos4118（2026.2.24）
「八百屋と鸚鵡の物語」mediopos4140（2026.3.13）に続いて、
「老いたハープ奏者（The Harper / 老楽師）の物語」をとりあげる。

少しばかり長い寓話だが、主には以下の通り。

かつて名高いハープ奏者だった老人が、老いて声が衰え、貧困と飢えに苦しんでいる。
ある日、 メディナの墓地で、神のためにだけハープを奏で、悲しみを歌い、糧を乞うたところ、天の声がカリフ・ウマルに告げ、ウマルは宝物庫の金を持って墓地へ行き、そこで眠る老人に与える。
老人は金を受け取ると即座にハープを打ち壊し、「これが私を神から遠ざけていた」と悔い、激しく泣き祈る。ウマルはさらにこう導く。「その泣きはまだ『自我』の状態だ。過去と未来のヴェールを焼き、悔いそのものからも悔いよ。真の境地は泣くことも笑うことも超えた、神の美への『溺没』なのだ」。
老人は自我を消し、神との合一（ファナー）に至り、魂が再生する･･･。

音楽は魂の「分離の嘆き」を表現するが、純粋に神のために奏でると神の応答を呼び起こす。しかし究極は、楽器（自我の象徴）を壊し、音そのものを超えること。
技巧や観客のための演奏は「自我の巡礼」でしかない。
真の音楽は、神の息吹が魂を通じて流れる、無音の合一である。

●以下、少し細かいあらすじ

導入部（老楽師の過去と現在）

ウマル・イブン・アル＝ハッターブ（第2代カリフ、神の喜びあれ）の時代に、かつては名高いハープ奏者（楽師）がいた。若い頃の彼の声はナイチンゲール（小夜啼鳥）を狂わせ、死者さえ蘇らせるほど美しく、イスラーフィール（復活の天使）の伴奏者のようだった。集いの飾りとなり、象に翼を生やすほどの力があった。しかし歳をとり、声は老いて醜くなり（ロバの鳴き声のよう）、誰も雇わず、七十年もの間音楽で生計を立てていた彼は貧困と飢えに苦しむ。

展開1：墓地での演奏と魂の昇天

ある日、飢えに耐えかね、メディナの墓地へ行き、「神のために」ハープを奏でる。神に絹の弦の代金を乞いながら長く弾き、泣きながら眠りに落ちる。魂は体を離れ、天上の蜜の海・ヨブの泉のような霊的世界へ飛ぶ。そこで「頭も足もなく旅し、手なくバラを集め、天の住人と戯れる」至福を味わう。神は「棘（足の棘＝執着）は抜けた、去るがいい」と命じるが、魂は慈悲の広大な領地に留まる。

挿話部（逸話）

ここでルーミーは以下の話を挿入
（「神の息吹」「霊的現実の証」として）

・アーイシャ（神の喜びあれ）が預言者ムハンマドに「今日は雨が降ったのに墓地から帰ったあなたの服が濡れていない」と問う → 霊的な「見えぬ雨（神の恵み）」の説明。
・春と秋の雨の違い → 聖者の息吹は春の雨のように心を活気づける。

・預言者の説教壇の「嘆く柱」 → 柱が預言者との別れを嘆き、ナツメヤシや糸杉になるか選ばせる話。預言者が柱を埋め、復活の日を約束。
・アブー・ジャフル（神の呪いあれ）の手の小石 → 小石が「神はなく、アッラー以外に。アフマド（ムハンマド）は神の使者」と信仰告白をし、奇跡を示す。

これらは「木や石さえ神の声を理解する」「理知を超えた神秘」を証明する。

展開2：ウマルの夢と行動

その夜、神はウマルに深い眠りを送り、夢で声をかける。「我が愛する僕（しもべ）が墓地で眠っている。公庫から700ディナール（金貨）を取り、徒歩で届けよ。『これを絹の代に使い、使い果たせばまた来るがいい』と」。ウマルは畏れを抱き、墓地を走り回る。最初は老人を「これではない」と見過ごすが、「多くの照らされた心は闇にある」と気づき、老人を見つける。

結末：贈与・悔悟・指導・合一

ウマルは金を与え、神からの挨拶を伝える。老人は全身で震え、恥じて、ハープを地面に叩きつけ粉々に砕く。七十年音楽に血を吸われ、神の完全の前に顔を黒くしたと激しく悔悟し、命の無駄を嘆く（イラクの旋律やジーラフガンドの音に没頭し、別離の瞬間を忘れた、と）。

ウマルは優しく諭す。「この涙もまだ『自己意識（清醒）』の印である。過去と未来は神の幕。火を投げよ。葦のように節（執着）がある限り秘密を分かち合えぬ。悔悟の悔悟をいつ悔いるのだ？ 今こそ自己消滅（ファナー）の道へ」。

老人の心は目覚め、涙も笑いもなくなり、動物魂が去り、霊魂が生き、地と天を超えた驚愕・没入に至り、「言葉と思いの超えた」状態で「威厳の主の美に溺れる」。部分的な理性では普遍的な理性の神秘を語れないが、神の「要求の後の要求」（永遠の衝動）でその波は届く。

物語は「老人の体験は幕の後に退いた」「魂と霊は見えぬ世界から流れる水のように来る」で締めくられ、読者に「数十万の魂を賭けて霊的な森を追え」と呼びかける。

●スーフィーの教え

この話はスーフィズム（タサッウフ）の核心を多層的に教える「寓話」である。
ルーミーは単なる道徳的な話ではなく、弟子（ホサームッディーンなど）への実践的指南として用いている。

主な教えは次の通り。

① 神の予期せぬ慈悲（Divine Grace / ラフマ）と「見えぬ世界」の介入

・老人が「神のために」墓地で弾くだけで、天の声がウマルに直接届く。

・教え：神の恵みは計算不能。貧困・絶望の極みでさえ、聖者の「息吹（ナファス）」や夢を通じて降る（ハディース「主は汝らの時に息吹をなす」参照）。アーイシャの「見えぬ雨」や春の雨の挿話が象徴。スーフィーは「努力＋待つ」ではなく、「神が動くのを信じる」姿勢を学ぶ。

② 世俗の才能・芸術（音楽）の「幕（ヒジャーブ）」と執着の断絶

・ハープは最初「死者を蘇らせる聖なる声」として描かれるが、老後には「血を飲む盗賊」「神の道を断つ幕」となる。老人はそれを粉々に破壊。
・教え：音楽・芸術・才能自体は悪くない（ルーミー自身が詩人・音楽好き）が、自我（ナフス）のために使うとヴェールになる。真の芸術は神への奉仕のみ。スーフィーの「放棄（タクリー）」の象徴で、師（ウマル＝霊的指導者）が「破壊」を促す。

③ 悔悟（タウバ）の深化と「自己消滅（ファナー）」への移行

・老人の激しい泣き・嘆きは「まだ清醒（ソブリティ / 自己意識）の段階」。ウマルが「過去を燃やせ」「この悔悟を悔いよ」と言う。
・教え：初めの悔悟は必要だが、止まると新たな自我になる。究極は「ファナー・フィッラー（神における消滅）」——「我」は消え、「神だけ」が残る状態（老人は「溺れて救いなし、神の海以外に知る者なし」）。これがスーフィーのゴールで、後の「バカー（神における存続）」へつながる。ルーミーは「清醒は別の罪」とまで言う。

④ 聖者（アブダール / クトゥブ）の役割と「神の声の代行」

・聖者は「現代のイスラーフィール」「心の調べはペリーや人間を超える」。ウマルや預言者はその体現。
・教え：真の師は神の舌・目・意識そのもの（「我は汝の舌と目」「汝は神に属し、神は汝に属す」）。光の連鎖（アダム→ムハンマド→聖者→弟子）で、神の光が伝わる。奇跡（柱・小石）が示すように、理知（アクル）を超えた「味わい（ザウク）」で理解する。

⑤ 理知の限界と「非知性的な道（タリーカ）」

・論理学者・哲学者は「木の脚」で倒れ、盲人。柱や小石が語るのは「『有れ』の命令を知る者」だけにわかる。
・教え：マスナヴィー全体のテーマ「愛は理性の否定」。懐疑者（アブー・ジャフル）は草の下に隠れ、偽のムスリムになる。スーフィーは「未踏の道を非知性的とせよ、心に受け入れられたものとせよ」。

⑥ 現在瞬間（ハール）の重視と永遠の新しさ

・「過去と未来は幕」「毎瞬空になり満ちる太陽のように」。老人は「今」没入し、物語は「魂は流れる水のように来る」で終わる。
・教え：スーフィーの実践は「現在に生きる」。古い世界に新しさを与えるのが神の太陽（現実の太陽＝神）。

この話は「音楽家から神の愛人へ」の変容を通じて、スーフィーの道筋（シャリーア→タリーカ→ハキーガ）を体現しています。ルーミーは「マスナヴィーは霊的開心手術」と評されるように、読む者に「数十万の魂を賭けよ」と迫ります。

●老いたハープ奏者（The Harper / 老楽師）の物語

（ウマル時代に飢えに苦しみ、神のために墓地でハープを奏でた老楽師の話）

ウマルの時代に、ハープの名手がいた。
麗しく輝く楽師、その声にナイチンゲールさえ狂おしくなる。

美しい調べ一つで、恍惚が百倍に膨らむ。
彼の息吹は集いの飾り、歌声に死者さえ蘇る。

イスラーフィール（セラフィエル）の如く、
その声は巧みに死者の魂を体に戻す。
あるいはイスラーフィールの伴奏者、
その音楽で象にさえ翼が生える。

やがてイスラーフィールが鋭く吹き鳴らし、
百年腐った者にも命を与えるだろう。
預言者たちも内なる調べを持ち、
神を求める者に無価の命を与える。
肉欲の耳はその調べを聞けぬ、
罪に汚れた耳ゆえ。

ペリーの調べも人間には聞こえぬ、
ペリーの神秘を捉えられぬから。
ペリーの調べもこの世のものだが、
心の調べは両者の息吹を超える。
ペリーも人も囚われ、
無知の牢獄に閉じ込められている。

ジン（精霊）と人の集いよ、『慈悲深き章』を誦せよ。
「汝ら能うならば出て行け」と知れ。
聖者たちの内なる調べが最初に言う、
「おお、無（非存在）の粒子たちよ、
否定の『ラ』から頭を上げよ、
この幻想と虚構から顔を出せ。
生成と腐敗に腐った者たちよ、
永遠の魂は生れもせず、育ちもせぬ。」

その聖なる調べを少しでも語れば、
魂たちは墓から頭を上げるだろう。
耳を近づけよ、あの調べは遠くない、
だが汝に伝えることは許されぬ。
聞け、聖者たちは今この時のイスラーフィール、
彼らから死者に命と新鮮さが来る。
彼らの声に、体という墓の死んだ魂が
死装束を纏って起き上がる。

彼は言う、「この声は他の声と違う、
死者を蘇らせるのは神の声の業。
我々は死に、完全に腐った、
神の呼び声が来て、我々皆蘇った。」

神の呼び声は、覆われていようと露わであろうと、
マリアに懐から与えたものを与える。
おお、皮膚の下で死に腐った者たちよ、

友の声に非存在から戻れ！

まことにその声は王（神）から、
たとえ神の僕の喉から出ようと。
神は彼（聖者）に言った、「我は汝の舌と目、
汝の感覚、汝の喜びと怒り。
行け、汝は『我によって聞く、我によって見る』者、
汝は（神の）意識そのもの、
『汝は意識の所有者』と言うのは不適切。

汝が驚愕により『神に属する者』となったゆえ、
我は汝のもの、『神は彼に属する』ゆえ。」
時に「汝だ」と言い、時に「我だ」と言う、
何を言おうと、我はすべてを照らす太陽。

我が息吹の灯龕から輝くところ、
一世界の困難が解ける。
地上の太陽が除けぬ闇を、
我の息吹で朝の明るき如くする。」

アダムに自ら（神の）名を示し、
他の者にはアダムを通じて名を顕わす。
アダムから光を受けよ、または彼自身から、
酒を甕から、または瓢から取れ。
この瓢は甕と密接につながる、
祝福された瓢は汝の喜ぶものとは違う。

ムスタファー（ムハンマド）は言った、
「我を見た者、我の顔を見た者を見た者は幸い。」
灯が蝋燭から光を得れば、
それを見る者は必ず蝋燭を見る。

百の灯に伝わろうと、
最後の灯を見るは元の光との出会い。
最後の光から全魂で取れ、差はない、
または燭台から直接。
最後の聖者の灯から神の光を見よ、
あるいは先人たちの蝋燭から。

（ハディースの解説：
「主は汝らの時に息吹をなし、それに向かえ。」）

預言者は言った、「この日々、神の息吹が満ちる、
耳と心をそれに傾けよ、そんな息吹を捉えよ。」 息吹が来て汝を見、去った、
望む者に命を与え去った。
もう一つの息吹が来た、
友よ、気をつけよ、これをも逃すな。

火の魂はそこで火を消すものを得、
死んだ魂は内に動きを感じた。

これはトゥーバーの木の新鮮さと動き、
動物の動きとは違う。
地と天に落ちれば、胆が水になる（恐怖に震える）。
この無限の息吹を恐れて、
「彼らはそれを負うことを拒んだ」と誦せよ。

さもなくば、山の心が血になる恐れはなく、
「彼らはそれを負うことを拒んだ」となぜあろう。
昨夜この息吹が別の姿で現れたが、
食物の欠片が来て道を塞いだ。

一口のためにルクマーンが質に取られる、
今はルクマーンの時、去れ、一口よ！
この肉の棘のために！ ルクマーンの足の棘を抜け。

彼の足に棘などない、影さえ、
だが貪欲ゆえに汝らは見抜けぬ。
棘とは、貪欲で盲目な汝がナツメヤシと思ったもの。
ルクマーンの霊は神のバラ園、
なぜ霊の足が棘に傷つく？

棘を食む存在はラクダ、
その背にムスタファー生れの者が乗る。
おおラクダ、背にバラの荷、
その香りで百の数珠が内に生えた。

汝の性向は棘の茂みと砂、
無価値な棘からどんなバラを集める？
この探求で四方八方を彷徨う者よ、
いつまで「どこだ、バラ園はどこだ」と言う？

足の棘を抜くまで、目は暗い、
どうして歩けよう。

世界に収まらぬ人が、棘の先で隠れる！
ムスタファーは調和を成すために来た、
「語れ、フマイラー、語れ！」と。

おおフマイラー、馬蹄を火にくべよ、
汝の馬蹄でこの山がルビーの如く燃えよ。
「フマイラー」は女性語、アラブは霊を女性と呼ぶ、
だが霊に女性である害はない、
霊は男とも女とも無関係。

それは女性・男性を超え、

乾きと湿りで成る霊ではない。
パンで増す霊でもなく、
時にこう、時にああと変わるものでもない。

それは甘きをなし、甘きであり、
甘さの本質。賄賂を取る者よ、
内なる甘さなくば甘さはない。

砂糖で甘くなっても、いつか砂糖は汝から去る、
だが忠実の豊かさで砂糖になれば、
砂糖が砂糖から離れることがあろうか？

愛する者が内から純粋な酒を飲めば、
理性は迷い、友なきまま残る。

部分的な理性は愛を否定、
信頼者と称しても。
賢く知っていても、自存を失わず、
天使が無にならぬ限りアーリマン（悪魔）。

言葉と行いでは友だが、
内なる恍惚の場では無価値。
無なのは、存在から消え無にならぬから、
自ら無にならぬなら、無理に無になる。

霊は完全、その呼びは完全、
ムスタファーは言った、「ビラール、我を新たにせよ！」

おおビラール、汝の心に我が吹き入れた息吹から、
甘美な声を上げよ。
アダムを呆然とさせ、天の人々の知を奪った息吹から。

ムスタファーはその美しい声に我を忘れ、
タアリースの夜、祈りを逃した。
祝福された眠りから頭を上げぬまま、
朝の祈りが午前へ進んだ。

タアリースの夜、彼の聖霊は花嫁の御前で手を接吻。
愛と霊は両方隠され覆われている、
神を花嫁と呼んだのを咎めるな。

愛する者の不興を恐れて黙っていたが、
一瞬の猶予を与えられぬ。
だが彼は言う、「語れ！ 来い、咎ではない、
見えぬ世界の定めゆえ。」

咎を見るのは咎のみを見る者、
見えぬ純粋な霊が咎を見るはずがない。

咎は無知な被造物に関わり、
恩寵の主にはない。
不信仰も創造主に対しては叡智、
だが我々に帰せば有害。

一つの咎と百の優越があれば、
サトウキビの木の如く、
両方秤にかけられる、
体と魂のように甘いから。
だから大いなる者たちは言った、
「聖者の体は本質的に霊のように純粋。」

彼らの言葉、魂、形、全てが絶対の霊、
外の痕跡なし。

彼らに敵意の霊は単なる体、
ナルドの「プラス」の如く、名のみ。
敵の体は地に入り完全に土に、
この聖体は塩に入り完全に純粋に。

ムハンマドをより洗練させる塩、
その塩味のハディースより雄弁。
この塩は彼の遺産に生きる、
その相続者たちが汝の傍に。求めよ！

彼は汝の前に座す、だが汝の「前」とはどこ？
彼は汝の前に、だが「前」を思う魂はどこ？

汝が「前」と「後」を思うなら、体に縛られ、
霊を奪われる。

「下」「上」「前」「後」は体の属性、
輝く霊の本質は方向を超える。

王の純粋な光で内なる視を開け、
近視のように思うな、
2010. 汝が悲しみと喜びの中のこの体だけと。
おお非存在よ、非存在に「前」「後」はどこ？

雨の日だ、夜まで旅せ、
この地上の雨でなく、主の雨で。

＊老楽師の物語の続き：

時が過ぎ、彼は老い、弱り、
魂の鷹は蚊を捕る者に。
背は酒甕の如く曲がり、

眉は鞍の帯の如く。

かつて魂を爽やかにした声は醜く、
誰にも価値なし。
ズフラ（金星）が羨んだ音色は、
今や老いたロバの鳴き声。

美しいものが醜くならぬものなく、
屋根が絨毯にならぬものなし――
聖者たちの胸の声以外、
その息吹の反響が復活のラッパ。
彼らの心はすべての心を酔わせ、
彼らの無が我々の存在を生む。

彼はすべての思いと声の琥珀（磁石）、
啓示、霊感、神の神秘の喜び。

老いて弱り、稼げず、
一斤のパンの借金。
「長寿と猶予を与え給うた、
おお神よ、卑しい者に多くの恵みを。

七十年罪を犯しつつ、
一日も恵みを止め給わず。
稼げぬ今日、汝の客、
汝のためにハープを奏でる、我は汝のもの。」

ハープを抱え、メディナの墓地へ、
神を求め、「ああ！」と叫び。
「絹の弦の代を神に乞う、
彼は優しく偽金も受け入れる。」

長く奏で、泣き、頭を垂れ、
ハープを枕に墓に倒れ。
眠りが来て、魂の鳥は檻から逃れ、
ハープと奏者を捨て、飛び去る。
体とこの世の痛みから解き放たれ、
単純な霊の世界、広大な領域へ。

そこで魂は歌う、何が起きたか、
「ここに留めてくれれば、
この庭と春に魂は幸せ、
この広野と神秘のアネモネの野に酔う。

頭も足もなく旅し、唇も歯もなく砂糖を食す。
脳の病なき記憶と思考で、天の住人と戯れる。
目をつむって世界を見、手なくバラとバジルを集める。」

水鳥（魂）は蜜の海に沈む――
ヨブの泉、飲み、浴び、
ヨブの足から頭までを日出の光のように清め。

マスナヴィーが空の広さでも、
この神秘の半分も収まらぬ。
広大な地と空が狭く、心を裂く、
この夢で開かれた世界が翼を広げる。

この世界と道が顕わなら、
誰も一瞬もあそこ（物質界）に留まらぬ。

（神の命令が来る――「貪るな、棘は足から抜けた、去れ」――
魂は神の慈悲の広大な領地に留まる……）

（物語はウマルの夢、神の声、金の贈与、老楽師の悔悟、
自己消滅への移行へと続き、完全な「無」への到達で締めくくられる。）

（魂はなおも留まる、神の慈悲と恩恵の広大な領地に。）

天の声が眠れるウマルに語りかけた話
（神よ、彼を喜ばせ給え）

神はウマルに深い眠気を送り、
彼は抗えず、眠りに落ちた。
彼は驚きに震え言った、「これは未知のもの。
見えぬ世界から降りし、目的なきはずはない。」

頭を伏せ、眠りが彼を包む。
夢に神からの声が響く。
その霊は聞く――すべての叫びと音の源なる声、
まことにそれこそ唯一の声、他はすべて反響。

トルクメンもクルドもペルシャ語の民もアラブも、
耳も唇もなくしてその声を理解した。
ましてやトルクメン、ペルシャ人、エチオピア人など、
木や石でさえその声を理解したではないか。
毎瞬、彼（神）から呼びかける、「我は汝らの主にあらずや？」
実体も偶有も、存在へと生まれる。

「然り」の答えがなくとも、
非存在から存在へ来るそれ自体が「然り」なのだ。
石や木の親しみ（気づき）について語った説明として、
美しい物語を聞け。

預言者（平和あれ）のための説教壇が作られた時、
群衆が多くなり、「汝の祝福された顔が見えぬ」と嘆き、
嘆きの柱が訴えた話。

預言者と仲間たちはその嘆きを聞き、
ムスタファーは柱と明瞭に語り合った。

嘆きの柱は、預言者からの別離を嘆く、
理ある者と同じように。

預言者が言う、「おお柱よ、何を望む？」
柱は答える、「汝との別れに魂は血と化した。
我は汝の支えだったのに、汝は我を逃れ、
説教壇に寄りかかる場所を新たに作った。」

「望むか、東と西の人々が実を集めるナツメヤシとなることを？
あるいは彼岸で永遠に新鮮な糸杉となることを？」

柱は答える、「永遠に続く命を望む。」
おお無頓着な者よ、聞け！ 木片以下になるな！

預言者はその柱を地に埋め、
復活の日に人々のように蘇らせるため。
ゆえに知れ、神に呼ばれた者は、
この世のすべての業から解き放たれる。

神から業と務めを持つ者は、そこへ入り、
世の業から去る。

霊的秘義の贈り物なき者は、
無生物の嘆きをどう信じよう？

彼は心からでなく、同意のため「然り」と言う、
人々が彼を偽善者と呼ばぬよう。

「有れ」の命令を知る者なくば、
この教え（無生物が語る）は世に拒絶されただろう。
無数の形式主義者、法学者たちが、
一つの疑いの汚れで深淵に投げ落とされる。

彼らの形式と論証からの証拠、
すべての翼と羽は意見に依る。

卑しき悪魔が疑いを起こす、
すべての盲人が頭から落ちる。

三段論法者の脚は木製、
木の脚は極めて弱い。

時代のクトゥブ（至高の聖者）、霊視の所有者とは違い、
彼の堅固さで山さえ眩暈する。
盲人の脚は杖、杖、

小石に頭から落ちぬよう。

軍の勝利をもたらした騎士は誰か？
宗教の軍にとっては、霊視を持つ者。

杖で盲人が道を見ても、
他者の保護の下でしか明瞭に見えぬ。

霊視の者、霊的王なくば、
世の盲人は皆死ぬ。盲からは蒔きも刈りも耕作も商いも利益も生まれぬ。
神が汝らに慈悲と恩寵を与えぬなら、
汝らの論証の木は折れる。

この杖とは何か？ 推論と論証。
誰が盲人にその杖を与えたか？ 全視全能の御方。

杖が争いと攻撃の武器となった今、
おお盲人よ、それを砕け！

近づくために杖を与えたのに、
怒りでそれをもって彼を打つとは。
おお盲人の集いよ、何をする？
見る者を神と汝らの間に置け！

杖を与えた御方の衣を掴め。
アダムの不服従から何を被ったか思え。
ムーサーとアフマド（ムハンマド）の奇跡を思え、
杖が蛇となり、柱が知を得た。

杖から蛇、柱から嘆き――
彼らは毎日五度、宗教のために栄誉の太鼓を打つ。
この味わい（霊的真理の感知）が非知性的でなければ、
どうしてこれらの奇跡が必要だったろう？

知性的なものは、奇跡の証拠なく、争いなく、
知性が飲み込む。
この未踏の道を非知性的とせよ、
幸運なる者の心に受け入れられたものとせよ。

アダムを恐れ、悪魔と野獣が島へ逃げたように、
嫉妬ゆえに。

預言者の奇跡を恐れ、懐疑者たちは草の下に潜む、
ムスリムとしての名声で偽善に生き、
汝らが彼らを知らぬよう。
偽金作りのように、卑金属に銀を塗り、
王の名を刻む。

彼らの言葉の外形は神の唯一性とイスラームの告白、
内なる意味はパンの中の毒麦の種の如し。

哲学者は一言吐く勇気なく、
一言吐けば、真の宗教が彼を困惑させる。
手足は無生物、彼の霊が命じれば従う。

懐疑者たちは舌で疑いの理由を述べても、
手足が彼らに反証を与える。

預言者（平和あれ）がアブー・ジャフル（神の呪いあれ）の手の小石に語らせ、
ムハンマドの真実を証言させた奇跡の話。

アブー・ジャフルの手に小石があった。
「おおアフマド、早くこれが何だか言え。
汝が神の使者なら、
我が拳に隠されたものを知るはず、天の神秘を知る者よ。」

彼は言う、「どう望む？ 隠されたものを私が言うか、
それともそれらが私が正しいと宣言するか？」

アブー・ジャフルは言う、「後者がより驚異的。」
預言者は言う、「然り、だが神はそれ以上の力を持つ。」

遅れず、閉じた拳の真ん中から、
すべての小石が信仰告白を唱え始めた。

各々が「神はなく」、
「アッラー以外に」と言い、
「アフマドは神の使者」との真珠を連ねた。
アブー・ジャフルが小石からそれを聞くと、
怒りに駆られ、それらを地面に叩きつけた。

老楽師の物語の残り、
信仰の指揮官ウマル（神よ彼を喜ばせ給え）が、
天の声の伝言を彼に届けた話。

戻って老楽師の苦境を聞け、
待ちくたびれ、絶望した彼を。

神の声がウマルに来る、「おおウマル、
我が僕を貧しさから救え。

我に愛され、高く尊ばれる僕がいる、
労をいとわず徒歩で墓地へ行け。
おおウマル、起き上がり、公庫から七百ディナールを満ちた手を。
彼に届けよ、『おお我が選ばれし者よ、
今この額を受け、少なき贈り物を許せ。

これを絹の代に使い、使い果たせばここへ戻れ。』」

ウマルはその声に畏れ、起き上がり、
この奉仕に腰を固めた。

ウマルは財布を脇に、墓地へ顔を向け、
神の寵児を求めて走る。
長く墓地を駆け巡る、
貧しき老人の他に誰もいない。
「これではない」と言い、再び走る。
疲れ果て、老人しか見えぬ。

彼は言う、「神は言われた、『我に僕がいる、
純粋で価値あり祝福された者。』

老いたハープ奏者がどうして神の選ばれし者か？
おお隠された神秘よ、なんと素晴らしい、素晴らしい！」

再び墓地を彷徨う、狩りの獅子のように。
老人が他にいないと確かめると言う、
「多くの照らされた心は闇の中にある。」

百の敬意をもって彼の傍に座る。
ウマルがくしゃみをすると、老人が飛び起きる。

彼はウマルを見て、驚愕に固まり、
去ろうと震え始める。

内心で言う、「おお神よ、助け給え！
監察官が貧しき老ハープ奏者に落ちた。」

ウマルが老人の顔を見ると、
恥じらいと蒼白。

ウマルは言う、「恐れるな、我から逃げるな、
神からの喜ばしい知らせを汝に持ってきた。
神は何度汝の性質を讃え、
ウマルを汝の顔に恋焦がれさせたか！

我の傍に座れ、別離を作るな、
神の恩寵からの秘密を耳に語ろう。

神は汝に挨拶を送り、
汝の苦難と果てなき悲しみを尋ねる。
見よ、ここに絹の代の金片がある。
使い果たし、ここへ戻れ。」

老人はこれを聞き、全身震え、手を噛み、

衣を引き裂く。
「おお比類なき神よ！」と叫び、
貧しき老人が恥に溶けた。

長く泣き、悲しみが限界を超え、
ハープを地に叩きつけ、砕いた。

言う、「おお汝（ハープ）、神からの幕よ、
王の道を断つ盗賊よ。
七十年我の血を飲み、
神の完全の前に我の顔を黒くした汝！

豊饒で忠実なる神よ、
罪に費やされた命に慈悲を！」

神は命を与え、
その一日の価値を彼以外知らぬ。
我は息ごとに命を費やし、
高音と低音にすべて吐き出した。

ああ、イラクの旋律とリズムに気を取られ、
別離の苦い瞬間を忘れた。

ああ、ミノール・ジーラフガンドの液体の新鮮さから、
心に蒔いた種が乾き、心は死んだ。

ああ、二十四の音に没頭し、
キャラバンは過ぎ、日は遅くなった。」

おお神よ、この助けを求める我に対して助け給え、
正義を求めるはこの我以外に求めぬ。

我は誰からも正義を得ぬ、
ただ我より近い御方から。

この「我性」は瞬ごとに彼から来る、
ゆえにこれが我を失わせば、我はただ彼を見る。

金を与える者に目を向けるように、
自分ではなく彼に。

ウマル（神よ彼を喜ばせ給え）が彼に命じた、
泣きの段階（自己存在）から視線を転じ、
神への没入の段階（自己の無）へ。

ウマルは言う、「この嘆きも汝の清醒（自己意識）の印。
自己を過ぎた者の道は別、
清醒は別の罪ゆえ。

清醒は過去の回想から生じる、
過去と未来は汝と神の幕。
両方に火を投げよ、これらゆえにいつまで葦のように節だらけか？

葦が節ある限り、秘密を分かち合えぬ、
笛の唇と声の伴侶になれぬ。

神を求め彷徨う時、彷徨いに包まれ、
家に帰ってもなお自己と共にある。
2205. おお知の与え主を知らぬ知識の者よ、
汝の悔悟は罪より悪い。

過去の状態を悔いると求める汝よ、
この悔悟をいつ悔いる？

時に高音の低い響きに、
時に泣きと嘆きに接吻する。」

ファールーク（ウマル）が神秘の反射となると、
老人の心は内から目覚める。

泣きも笑いもなく、魂の如く。
動物魂は去り、もう一つの魂が生きる。
その時、彼の中に驚愕が生じ、
地と天から出でた——

すべての探求を超えた探求と捜索、
我は知らぬ、汝知るなら語れ！

言葉と思いの超えた言葉と思い——
彼は威厳の主の美に溺れた。

溺れ、救いなどなく、
神の海以外に彼を知る者なし。

部分理性が普遍理性の神秘を語らぬなら、
要求の後の要求（永遠の神の衝動）なくば。
要求が次々と来るゆえ、
その海の波がこの場所（部分理性の世界）に届く。

老人の霊的体験の物語がここに至り、
老人と体験は幕の後に退いた。

老人は話と言葉から裙を振り払い、
物語の半分が我らの口に残った。

この喜びと楽しみを得るため、

数十万の魂を賭けよ。

霊的森の追跡に鷹となれ、
この世の太陽のように魂を賭ける者となれ。
高き太陽は命を拡散、
毎瞬空になり、満ちる。

おお現実の太陽よ、霊的命を拡散せよ、
この古き世界に新しさを顕わせ！

魂と霊は見えぬ世界から人間の存在へ、
流れる水のように来る。

〇訳註

・ペリー（ペリーの調べ／ペリーの神秘等）
ルーミーの詩では、美しい翼を持つ精霊だが、単なる妖精ではなく、人間より高いがまだ不完全な霊的存在を象徴し、霊的階層の比喩として用いられている。人間はペリの音さえ聞けないほど低い位置にあり、ペリ自身もまだ「囚人」。だからこそ、心を開いて聖人の導き（神の旋律）に耳を澄ませ、というメッセージである。
・イスラーフィール（セラフィエル）：
単なる終末の喇叭（らっぱ）吹きという役割を超え、「魂の再生」と「霊的なインスピレーション」の象徴。
・トゥーバーの木：
イスラームの伝統およびスーフィズムにおいて、天国（ジャンナ）の中心にそびえ立つとされる巨大な聖なる木のこと
・ルクマーン：
クルアーン（コーラン）第31章の題名にもなっている伝説的な「賢者」
・フマイラー：
預言者ムハンマドが最愛の妻アーイシャに対して用いた愛称
・ビラール：
イスラーム最初期の黒人信徒で、世界で初めてアザーン（礼拝の呼びかけ）を行った人物
・ズフラ（金星）：
「天上の音楽」と「美」の象徴
・メディナ：
「光り輝く都市（アル＝マディーナ・アル＝ムナウワラ）」として、魂が安らぎと導きを得る「霊的な聖域」を象徴。
・ファールーク（ウマル）：
イスラーム第2代正統カリフ、ウマル・イブン・ハッターブに与えられた称号です。アラビア語で「真理と虚偽を峻別する者」を意味する。
・クトゥブ（至高の聖者）：
アラビア語で「軸」や「極」を意味し、スーフィズムの階層構造において最高位に位置する聖者を指す。
・アブー・ジャフル：
アラビア語で「無知の父」を意味し、預言者ムハンマドの最大の敵対者の一人で
・ミノール・ジーラフガンド：
伝統的なマカーム（イスラーム圏の旋法体系）における特定の旋律や、古典音楽の構造に関連する用語。

■詩集『マスナヴィー』

④「ぶどうをめぐる四人の争い」（第二巻より）

「葦の歌」「八百屋と鸚鵡の物語」
「老いた楽師の物語」に続いて、
第二巻から「ぶどうをめぐる四人の争い」をとりあげる。

●寓話の基本的な視点

名前（形式）と実体（本質）。
宗教も文化も言語も、外見は多様だが、真実は一つ。
表層の違いに囚われ争う愚かさを戒め、
導師の智慧によって本質を見抜き、和合せよと呼びかける。

●あらすじ

四人の旅人（ペルシア人、アラブ人、トルコ人、ギリシャ人）が
一緒に旅をしていて、1ディルヘム（銀貨）をもらう。
それぞれがそのお金で「ぶどう」を買いたいと思うのだが、

ペルシア人は「angur（アンゴール）」を！と言い、
アラブ人は「inab（イナブ）」を！と言い、
トルコ人は「uzum（ウズム）」を！と言い、
ギリシャ人は「istafil（イスタフィル、staphyle）」を！と言う。

言葉が違うため、それぞれが
「別のものを欲しがっている」と勘違いし、激しく喧嘩を始める。
そこに多言語を理解する賢者が現れ、
「みんな同じ『ぶどう』を欲しがっているだけだ」と説明。
1ディルヘムで全員の望みを叶え、争いは和解に変わる。

●寓話の意味

ルーミーはスーフィズム（イスラム神秘主義）の観点から、
人間が表面的な違い（名前、言語、形式、宗派、文化など）に囚われ、
本質を見失う愚かさを風刺している。

真実は一つ（ここでは「ぶどう」＝神の真理や内面的な欲求）。
けれど人々は自分の言語・文化・解釈の枠組みでしか捉えられず、
他者を敵視して争ってしまう。
賢者（導師、シャイフ、預言者的な存在）は多様な言語を知り、
本質を明らかにして統一をもたらす。

スーフィー的な探求においても、
外面的儀式や言葉の違いにこだわると分裂を生んでしまうが、
本質（神への愛、魂の平和）に向かえば和合できる。
ルーミーはこれを「Solomon（預言者スライマーン）の知恵」に喩え、

敵同士を仲直りさせる力として描いている。

このことは、多文化共生、宗教間対話、
または日常の誤解（「同じことを違う言葉で言っている」）に通じている。
争いの根源は無知であること。
知識と智慧、忍耐（賢者の介入）が解決策となる。

●本文（意訳）

「四人の旅人と一枚のディルヘム」
（ぶどうをめぐる四人の争い）

ある男が、四人の旅人に一枚の銀貨（ディルヘム）を恵んだ。
ペルシア人、アラブ人、トルコ人、ギリシャ人――
皆で旅をしていた者たちへ。

ペルシア人が言った。
「これで『アンゴール』を買おう」
アラブ人が怒鳴った。
「いや、俺は『イナブ』だ！　お前、詐欺師め！」
トルコ人が叫んだ。
「『ウズム』が欲しい！　イナブなどいらぬ」
ギリシャ人が言い放った。
「黙れ皆の者！　俺は『イスターフィル』がいい」

言葉は違えど、皆が欲したものは同じ――熟れたぶどう一つ。
だが互いの言語を知らず、ただ表面の名前に囚われ、
激しく拳を振り上げ、争いは激しく燃え上がった。
無知の闇が、彼らを盲目にし、知識の光を遠ざけた。

そこへ、賢き導師が現れた。
多言語に通じ、心の奥を照らす者。
「静まれ、皆よ。
この一枚の銀貨で、望みをすべて叶えよう。
心を偽りなく我に委ねよ。
この一枚が四つに分かれ、汝らの欲求を満たさん。
四人の敵が、一つに和するだろう」

「汝らの言葉は、表向きは同じ響きを帯びるが、
実は争いと怒りの種となる。
我が言葉は、統一と平和をもたらす。
故に黙して我に任せよ。我が舌となりて語らん」

人工の熱は本質を変えず、
酢を火で温めても飲めば体を冷やす。
ぶどうのシロップを凍らせても、肝に熱を加える。
本質を知る者の偽りさえ、盲目なる者の誠実より優る。

導師の言葉は結合を生み、
妬む者の言葉は分離を生む。
預言者スライマーン（ソロモン）のように、
鳥の言葉を知り、敵同士を和解させたごとく。

汝は蟻のように一粒の穀物を追い、
なぜスライマーン（真の智慧）を求めぬのか。
穀物を求める者は罠に落ち、
智慧を求める者は両方を手にする。

＊＊＊＊＊

この話は別の視点で読み直すこともできる。
同じ言葉を使っているのに、
別の意味を表している場合である。
このほうが始末が悪いといえる。

「平和を！」といっても、
同じことを意味しているとはいえないことも多々あるように。

賢者はそういうとき、どうすればいいのだろう。
ある意味、そのプロセスは複雑で、
ともすればその試みをする賢者は火あぶりにさえなりかねない。

課題は時代や状況に応じて、単純ではない･･･。

■詩集『マスナヴィー』

⑤「新月を見たと思い込んだ者」（第二巻より）

「葦の歌」「八百屋と鸚鵡の物語」「老いた楽師の物語」
「ぶどうをめぐる四人の争い」に続き、
第二巻から「新月を見たと思い込んだ者」をとりあげる。

●寓話の基本的な視点

「曲がった心が真実を覆う」という深い戒め。
一本の眉毛の曲がりが月を隠したように、
欲望や偏りが神の光を遮ることを、ルーミーは美しく語る。

●あらすじ

ラマダーンの月（断食月）が近づいた頃、
オマル・イブン・アル＝ハッターブ（第2代カリフ）の時代に、
人々が丘の上に登って新月（ヒラール）を見ようとした。

一人が「オマルよ、これが新月だ！」と叫んだ。
しかしオマルは空に月を見なかった。
「それはお前の幻想から生まれた月だ」と言い、こう教えた。

「手を濡らして眉をこすってからもう一度見ろ」。
男がそうすると月が見えなくなり、オマルは説明した。

「お前の眉の毛が曲がって弓のようになり、幻想の矢を射かけたのだ。
一本の曲がった毛が空を覆い隠すほどなら、全身が曲がっていたらどうなるか」。

●寓話の意味

真実を見る眼を曇らせるのは、
外の世界ではなく、自分の内なる一本の曲がった毛である。
それを正すには、完全なる師の前で徹底的に浄化されなければならない。
さもなくば、富や地位という藁が喉に刺さったまま、永遠に生命の水を飲めない。

●本文（意訳）

ウマル様の時代のこと
ある人が幻を見て、新月と信じ込んだ

ラマダーンの月が巡り来て
人々は丘の頂に駆け登り
吉兆の新月を求め仰いだ
一人が叫ぶ、「ウマル様、見てください！
あそこに新月が！」

ウマルは空を見ても、何も見えず
静かに言われた、「それはお前の幻想が生んだ月だ
我は天をよく見る者、なぜあの清らかな三日月が見えぬ？」

「手を濡らして、眉を拭え」
そう言われて、男は眉を濡らし
再び空を仰いだ――月は消えていた

「おお王よ、月はありません……」
ウマルは微笑み、こう告げられた

「眉の毛が弓のように曲がり
お前に妄想の矢を放ったのだ
一本の曲がった毛が天を遮る
ならば、全ての体が曲がった時、どうなるか」

曲がった一本の毛が真実を隠す
ましてや、全ての肢体が曲がれば

正しき者によって、自らを正せ
まっすぐ歩もうとする者よ
聖なる人々の門から、顔を背けるな

秤は秤を正し、秤は秤を狂わせる
不義の者と同じ秤を用いる者は
必ず欠落し、心は惑う

不信者には厳しくあれ
異邦人への情など、塵に捨てよ

剣となって、異邦人の頭上に立て
狐の狡猾を捨て、獅子となれ

さもなくば、神の友たちは嫉妬に燃え
汝と縁を切るだろう
なぜなら、あの棘どもは、この薔薇の敵なのだ

狼たちに、ルー種子のように火を放て
あの狼どもは、ユースフの敵

悪魔は「おお、父の魂よ」と甘く呼ぶ
気をつけよ、呪われた悪魔は
言葉で汝を惑わそうとする

かつて汝の父にも同じ手を使った
あの黒い顔の者が、アーダムを詰まらせた

この烏は今、将棋盤の上で忙しい
半ば眠った目で、その駒さばきを見てはならぬ

恐るべき手を数多く知っている
それは喉に刺さる藁となる

その藁は、何年も喉に残る
その藁とは何か――位と富への愛

富は藁なり、病める者よ
それは生命の水を飲む道を塞ぐ

もし巧みな敵が汝の富を奪うなら
盗人が盗人を奪っただけのこと――

〇訳註

・ルー種子
魔除け、エゴを焼き払う祈り。
「ルー（ワイルドルー、和名：ハルマラ）」の種子を火にくべて、その煙で「邪視（悪意の目）」を払う中東の伝統習慣に基づいている。

・ユースフ（Joseph）
神聖な美、真理、魂の輝き。
旧約聖書やクルアーンに登場する預言者ユースフ（ヨセフ）は、イスラム神秘主義（スーフィズム）において「絶世の美」や「神の反映」の象徴。ルーミーは彼を、人間の内側にある「真実の自己」や「魂の光」として描いている。

■詩集『マスナヴィー』

⑥「スーフィーのロバ」（第二巻より）

「葦の歌」「八百屋と鸚鵡の物語」
「老いた楽師の物語」「ぶどうをめぐる四人の争い」
「新月を見たと思い込んだ者」に続き、
第二巻から「スーフィーのロバ」

●寓話の基本的な視点

甘い言葉に騙されず、
自分の驢馬（魂）を自分でちゃんと世話しなさい。
他人に任せた瞬間、飢えと苦しみが待っている

●要約（あらすじ）

スーフィーが修道院に宿泊し、
連れてきた驢馬の世話を召使いに丁寧に頼んだ。
「大麦を湿らせて、
鞍を外して背中の傷に薬を塗り、藁を少しだけ…」
と具体的に指示する。

召使いは「大丈夫です、わかっています」
と表面上は丁寧に答えながら、すべて無視。
仲間と遊び呆け、驢馬には一粒の餌も与えなかった。

スーフィーは不安な夢を見て一晩中苦しみ、
驢馬は飢えと寒さで苦しみ続ける。
翌朝、驢馬は衰弱して何度も倒れ、
キャラバンの人々は「病んでいる」と騒ぐ。

スーフィーはため息をつきながら言う。
「この驢馬は夜の間に
『ラーハウル（神の力以外に力はない）』だけを食べたのだ。
だからこうなる。

●具体的な寓話の教訓

１．表面的な言葉を信じるな

多くの人は召使いのように
「大丈夫です」「心配ありません」と甘い言葉を言うが、
心は悪魔の家。行動が伴わない親切は罠である。

２．内実と外見の違い

真のスーフィー（霊的人間）は

足跡や香り（直観・神の導き）で真理を追うが、
凡人は形や言葉だけを見て騙される。

３．思考が自分を作る

汝は自分の思考そのものである。
善い思いを抱けばバラの園、悪い思いを抱けば地獄の燃料となる。

４．預言者たちの役割

神は預言者たちを遣わし、
善と悪、真金と偽金をより分けるために啓示を与えた。
人間は元々混沌としてるからである。

※訳註（参考）

・ラーハウル
アッラーの助け（力）なくしては、
力を持ち得ず、悪を避けることもできない」という意味を持つ、
神への絶対的な依り頼みと謙遜の言葉。
この寓話では、召使いがスーフィーの細かい指示に対して
毎回皮肉たっぷりに「やれやれ！」の意味で「ラーハウル」と返事する。
表面上は「もう、わかりましたよ」という軽い返事だが、
実際には神の御力に委ねる真の祈りを、
怠惰と無責任の口実に使っているというユーモラスで風刺的な描写。

●本文（意訳）

「スーフィーが召使いに獣の世話を命じ、
　召使いが「ラーハウル」と答えたこと」

スーフィー、世をさまよい
ある夜、修道院に宿を求めた。
獣（ロバ）を厩舎に繋ぎ、
自らは高座に座り、友らと語らう。

友の存在こそ書物なり、それ以上なり。
スーフィーの書は墨と文字にあらず、
ただ雪のように白き心のみ。

学者は筆の跡を糧とし、
スーフィーは足跡を糧とする。
狩人のごとく獲物を追う、
麝香鹿の跡を見つけ、足跡に従う。

しばしは鹿の跡が道標となり、
やがては鹿の臍（麝香）が導きとなる。
足跡に感謝し、道を越えれば、

その跡によって必ず目的に達す。

しばしは鹿の跡が道標となり、
やがては鹿の臍（麝香）が導きとなる。
跡に感謝し、道を越えれば、
その跡によって必ず目的に達す。

汝らには壁、彼らには門。
汝らには石、彼らには真珠。
鏡に映るものも、導師は煉瓦に見る。

導師たちよ、その霊は
この世が創られる前より、
神の恩寵の海にありき。
この体が生まれる前に幾世を過ごし、
種まく前に麦を刈り取れり。

形ある前に霊を受け、
海ある前に真珠を穿てり。
人間を創る相談のとき、
その霊は全能の海に喉まで浸かり、
天使たちが反対する中、
密かに手を叩いて嘲りたり。

彼はすべての存在の形を知り、
普遍なる魂が物質に縛られる前に。
天ある前に土星を見、
種ある前にパンを知れり。

脳も心もなしに思惟に満ち、
軍も戦いもなしに勝利を得たり。

彼らにとって直観は思惟なり、
遠き者にとっては幻なり。
思惟は過去と未来のもの、
これらより解き放たれれば、難事は解ける。

霊は葡萄の中に葡萄酒を見、
無の中に有を見たり。
条件あるものを無条件に見、
鉱山ある前に純金と偽金を見たり。

葡萄創られる前に酒を飲み、
酔いの興奮を示せり。
熱き七月の中に十二月を見、
陽光の中に影を見たり。
葡萄の芯に葡萄酒を見、
絶対なる無（ファナー）の中に有を見たり。

天は彼らの巡る杯より酒を飲み、
太陽は彼らの恩寵により黄金の衣をまとう。
二人が友として出会えば、
一にして同時に六十万なり。

その数は波の如し、
風が一を多に分かつ。
霊の太陽は、体の窓々に分かれし光。
太陽の円盤を見れば一つなり、
体に遮られたる者は疑う。

分離は動物の霊にあり、
人間の霊は一つの本質。
神がその光を人々に振りかけしゆえ、
光は決して分離せず。

道の友よ、疲れをしばし捨てよ、
その美の一点を語らん。
その境地の美は語り尽くせぬ、
二つの世界など、そのほくろの影に過ぎず。
その美しきほくろについて一言吐けば、
わが言葉は体を破らんとする。

蟻のごとく、この穀倉に喜び、
己の力に余る荷を引く。

（物語の内なる説明が、聴き手の欲求によって中断され、寓話が語られる）

海は泡を前面に投げ、障壁を作る。
引き、引きつつ再び流れ入る。
今、何がわが解説を妨げるか。
聴衆の心は他所へさまよえる。
その思いはスーフィーの客に注がれ、
首までそのことに没せり。

ゆえにこの語りより物語に戻り、
何が起こったかを語らん。

親しき友よ、スーフィーを外形と思うな。
いつまで子供のごとく、胡桃と干し葡萄で満足するか。

わが体は胡桃と干し葡萄なり、子よ。
汝が人ならば、これらを捨てよ。
自ら捨てられぬとも、神の恵みは
九層の天を超えさせる。

今、物語の外形を聞け、

しかし麦と殻を分けよ。

（キャラバンの人々がスーフィーの獣を病んだと思う話）

スーフィーたちの輪の瞑想が、
ついに恍惚と熱狂に達したとき、
客のために食物の皿が運ばれ、
彼は己の獣を思い出した。

召使いに言う、「厩舎に行き、
藁と大麦を獣のために整えよ」。
「やれやれ！」と答え、「なぜそんなに仰せられる。
そんなことは昔から私の役目です」。

スーフィー言う、「まず大麦を湿らせよ、
老いたロバゆえ、歯が弱い」。
「やれやれ！」と、「なぜおっしゃるのか、
そんな手配は私が教えてきたことです」。

スーフィー言う、「まず鞍を外し、
背中の傷にマンバルの膏薬を塗れ」。

「やれやれ！」と召使い、「智慧の御方よ、
私はあなたのような客を千人も迎え、
皆、満足して去られました。
客は我らの命、我らの親族です」。

スーフィー言う、「水を与えよ、だがぬるま湯で」。
「やれやれ！」と、「恥ずかしい」。

スーフィー言う、「大麦に藁を少しだけ」。
「やれやれ！　そのお言葉を短く」。

スーフィー言う、「石と糞を掃き、
湿っていれば乾いた土を撒け」。

「やれやれ！」と、「神の恵みを祈り、
父上よ、少なめに。仕事を知る者に」。

スーフィー言う、「櫛でロバの背を梳け」。
「やれやれ！　恥を知りなさい、父上」。

召使いはそう言い、腰を締め、
「参ります。先に藁と大麦を」と。

去りて厩舎のことなど全く思わず、
スーフィーに兎の眠りのような偽りを与えたり。
召使いは悪者どもと遊び、

スーフィーの忠告を嘲笑せり。

スーフィーは旅に疲れ、手足を伸ばし、
目を閉じて夢見る――
己のロバが狼の爪に落ち、
背と腿から肉を裂かれる夢を。

「やれやれ！」と叫ぶ、「これは何という憂鬱か。
あの親切な召使いはどこに」。

再びロバが道を歩み、
井戸に落ち、溝に落ちる夢。
さまざまな不吉な夢を見、
ファーティハとカーリアを唱えたり。

「どうしよう。友らは急ぎ出て、
去り、すべての扉を閉ざした」。

再び思う、「ああ、あの哀れな召使い。
我らとパンを分け、塩を共にしたではないか。
私はただ礼儀と優しさを見せたのに、
なぜ逆に憎しみを返すのか」。

「すべての敵意には原因がある。
さもなくば、人間性は忠実を命じる」。
再び言う、「慈悲深きアーダムが、
いつイブリースに害をなしたか」。
［訳註：イブリース（悪魔）］

「人間が蛇や蠍に何をしたというのか、
彼らは死と痛みを欲するか。
狼が裂くのは本能、
この嫉みは人間にも明らか」。

再び言う、「悪く思うのは誤り。
なぜ兄弟にこのような思いを」。
また言う、「用心とは悪く思うこと。
悪く思わぬ者は傷つかぬ」。

スーフィーはこの不安の中に、
ロバは敵にかかるような惨めな状態。

哀れなるロバは土と石の中に、
鞍は曲がり、手綱は裂け、
旅に疲れ、一夜中飼料なし、
今や息絶え絶え、死にかけたり。

一晩中ロバは繰り返す、

「神よ、大麦は諦める、藁の一握りもくれぬのか」。
無言の雄弁で言う、
「シャイフたちよ、憐れみを。
この生々しく厚かましい悪党ゆえに、私は焼けつく」。

その夜明けまで、飢えのあまり
哀れなるロバは横に転がり。

朝となり、召使い来たり、
素早く鞍を探し、ロバの背に置く。
ロバ商人のごとく二、三度突き棒で打ち、
犬のような奴がロバにする仕打ちを。

刺す痛みにロバは跳ね、
己の状態を語る舌などどこにあろう。

スーフィーが乗り、進み出れば、
ロバは毎回顔から倒れ、

人々は毎回起き上げ、
皆、病んだと思う。

一人は耳を強く捻り、
他は口蓋の下の傷を探し、
他は靴の石を探し、
他は目の汚れを見る。

皆言う、「シャイフよ、何の原因か。
昨日は『このロバは強い』と言われたのに」。

彼答える、「夜に『ラーハウル』を食べたロバは、
こうでなければ歩けぬ。

夜のロバの糧が『ラーハウル』ゆえ、
夜は神を讃え、昼はサジダする」。

［訳註：サジダ（跪拝・ひざまずくこと）］

多くの人は人食いなり、
「平安あれ」という言葉を信じるな。
すべての心は悪魔の家、
悪魔の如き者の戯言を聞くな。

悪魔の息より『ラーハウル』を飲みし者は、
あのロバのように戦いで転ぶ。

この世で悪魔の欺瞞を飲み、
友の顔した敵より敬意と偽りを飲む者は、

イスラームの道とシラート橋にて、
めまいにより頭から落ちん、あのロバのごとく。

悪しき友の甘言を聞くな。
罠を見よ、大地を安心して歩むな。

十万の悪魔が『ラーハウル』を言うを見よ。
アーダムよ、蛇の中にイブリースを見るがよい。

彼は虚言を与え、「我が魂よ、愛しき者よ」と言い、
愛しき者の皮を剥ぐ、屠殺者のごとく。

虚言を与えて汝の皮を剥ぎ、
敵の口より阿片を味わう者に災いあれ。

足元に頭を置き、屠殺者のごとく甘言を吐き、
哀れに汝の血を流さん。

獅子のごとく、自ら獲物を狩れ。
他人も身内も、甘言を捨てよ。

卑しき者の好意はあの召使いの如し。
誰もおらぬ方が、卑しき者のおべっかよりまし。

他人の土地に家を建てるな。
己の仕事をせよ、他人の仕事をするな。
他人は誰か。汝の土の体、
それゆえにすべての悲しみあり。

体に脂濃く甘き食物を与え続ける限り、
汝の本質の肥えを見ることはない。
体を麝香の中に置いても、
死の日にその悪臭は明らかとなる。

体に麝香を塗るな、心に擦り込め。
麝香とは何ぞ。栄光の神の聖なる御名。

偽善者は体に麝香を塗り、
霊を灰の底に置く。
舌に神の名、魂に不信の思想の悪臭。

彼にとって神の賛美は灰の草、
糞の上に咲くバラと百合。
その植物は確かに借り物、
花の本当の場所は宴と祝いの席。

善女は善男に来たり、
悪女は悪男に来たる。

見よ、悪意に導かれる者、
その墓は悪意ある者の傍らに。
悪意の起源は地獄、
汝の悪意はその一部、汝の宗教の敵。

汝は地獄の一部ゆえ、用心せよ。
部分は全体に向かう。

苦き者は苦き者に付く、
虚言が真理と結ばれるはずがない。

兄弟よ、汝は汝の思惟そのもの、
残りはただ骨と繊維。

思惟がバラならば汝はバラ園、
棘ならば汝は風呂釜の燃料。
バラ水ならば頭と胸に振りかけられ、
尿の如く臭えば投げ捨てられる。

薬種屋の前の盆を見よ、
それぞれ同種のもの同士。
同種のものが混じり、
その同質性によりある優雅さが生まれる。
沈香と砂糖が混ざれば、
一片ずつ彼は分け取る。

盆は壊れ、魂はこぼれ、
善と悪は混じり合えり。

神は預言者たちを啓示の巻物と共に遣わし、
この盆の麦粒を分別せんとした。

以前、我らは一つの共同体、
善か悪か誰も知らず。
偽金と純金が世に流通し、
すべて夜、我らは夜の旅人なりし。
預言者の太陽が昇り、言う、
「去れ、偽者よ！　来れ、純なる者よ！」。

目は色を区別し、ルビーと石を知る。
宝石と塵を知る、ゆえに塵は目を刺す。

卑しき偽金造りたちは日の敵、
鉱山の黄金たちは日の恋人。
日はそれを明らかにする鏡ゆえ、
純金貨は日の栄誉を受ける。

ゆえに神は復活を「日」と名付けたり、
日は赤と黄の美を示す。

真に、日は神の人の内なる意識の反映、
その月の傍らでは日は影のごとし。

日は神の人の神秘の反映、
目を塞ぐ夜はその隠蔽の反映。

ゆえに神は言う、「暁にかけて」。
暁とはムスタファー（ムハンマド）の隠された心の光。
他の見解、愛しき御方が文字通りの朝を意味したというのは、
それもまた彼の反映であるゆえ。
さもなくば、過ぎ去るものに誓うは誤り、
神の言葉に過ぎ去るは相応しからず。

あの友（イブラヒーム）は言う、「私は沈むものを愛さず」。
栄光の主が過ぎ去りを意味するはずがない。
また、「夜にかけて」は彼の隠蔽と土の錆びた体。

その空よりその太陽が昇るとき、
体の夜に言う、「汝を見捨てず」。
苦しみの本質より合一が現れ、
その甘さは「汝を憎まず」と表現された。

実に、すべての表現は状態の象徴、
状態は手、表現は道具。
金細工師の道具が靴屋の手にあるは、
砂に蒔かれた種のごとし。
靴屋の道具が農夫の前にあれば、
犬の前の藁、驢馬の前の骨。

マンソールの唇の「私は神」は光、
ファラオの唇の「私はアッラー」は嘘。
モーセの手の杖は証人となり、
魔術師の手の杖は空中の塵となる。

［訳註：マンソール10世紀のスーフィー、マンスール・アル＝ハッラージュ］

ゆえにイエスは旅の友に主の御名を教えなかった、
彼は正しく用いられず、道具に欠陥を帰するから。
石を粘土に打ち、火が飛び出るか。

手と道具は石と鉄、
対がなければならぬ。対こそ誕生の条件。

唯一者は伴侶も道具も持たず、
数には疑いあり、その唯一者は疑いを超える。

「二」と言う者も「三」と言う者も、
実は唯一を認めている。

斜視を捨てれば皆同じ、
二や三を主張する者も一を主張する。

汝が王のポロ競技場の球ならば、
王の杖の打撃により回転せよ。
球が正しく完全となるのは、
王の手の打撃により踊るときのみ。

注意深くこれを聞け、斜視の者よ。
耳を通じて目薬を施せ。

聖なる言葉は盲いたる心に留まらず、
来たるところの光へ行く。
悪魔の呪いは曲がった心へ、
曲がった靴が曲がった足に。

知恵を暗記しても、汝が相応しからねば去る。
書き記し、誇り、解説しても、

論争する者よ、それは汝から顔を背け、
絆を断ち、汝から飛び去る。

読まなくても、汝の愛の熱情を見れば、
知識は手に馴染む鳥となる。
すべての未熟な初心者の許に留まらず、
孔雀が農夫の家に留まらぬが如し。

■詩集『マスナヴィー』

⑦「暗闇の中の象」（第三巻より）

「葦の歌」「八百屋と鸚鵡の物語」
「老いた楽師の物語」「ぶどうをめぐる四人の争い」
「新月を見たと思い込んだ者」「スーフィーのロバ」に続き、
第三巻から「暗闇の中の象」

●寓話の基本的な視点

人間の理性・感覚・宗派・知識は部分的にしか真実を捉えられない。
全体（神・真理）を見るには「光」（神の啓示・霊的覚醒）が必要。

宗教的・哲学的な対立や傲慢さを風刺。
スーフィズムの核心「部分から全体へ、自我から神へ」の比喩。

●要約（あらすじ）

暗い部屋に象が連れてこられ、人々が手で触って象を想像する。
一人は鼻を触って「水管」、耳を触って「扇」、
脚を触って「柱」、背中を触って「王座」などと主張し、互いに争い、
誰も全体像を見ていないのに「自分が正しい」と信じる。

●本文（意訳）

〈象と盲人たちの寓話〉

暗き家の中に象はあり
ヒンドゥー人ら展示のため連れ来たりき

それを見んと多くの民
それぞれ暗闇の中へ入りゆく

目にて見ること叶わねば
皆、手のひらにて暗く探る

一人の手、鼻に触れぬ
「これは水道管の如し」と言う

また一人の手、耳に触れ
「扇子のよう」と見えたり

脚に触れし者は言えり
「柱のごとき象の形」と

背に手を置く者は言う
「まことに玉座の如くなりき」

かくのごとく誰も彼も
触れし部分のみを理解す

見る所異なるゆえに
語ることばも皆違えり
ある者は「ダール」、
ある者は「アリフ」と呼ぶ

手にろうそく一つずつあらば
ことばの違いは消え失せしものを

感覚の目はただ手のひら
手のひらに象の全体は届かじ

海の目は一つ、泡は別なり
泡を捨てよ、海の目で見よ

昼も夜も泡は海より湧き出で
汝は泡を見る、海は見ず　不思議なりや！

我らは互いにぶつかり舟のごとく
目は暗くされど、清らかな水の中にあり

おお、身体の舟に眠る者よ
水は見たれど、水の水を見よ

水を駆る水あり、霊を呼ぶ霊あり

■詩集『マスナヴィー』

⑧「マールギールと凍った蛇」（第三巻より）

「葦の歌」「八百屋と鸚鵡の物語」
「老いた楽師の物語」「ぶどうをめぐる四人の争い」
「新月を見たと思い込んだ者」「スーフィーのロバ」
「暗闇の中の象」に続き、
第三巻から「マールギールと凍った蛇」

●寓話の基本的な視点

人間の内なる欲情（nafs：自我・肉欲・動物的な魂）を凍った蛇に喩え、
寒さ（貧困・屈辱・抑制）で一時的に動かなくなっていても、
暖かさ（富・権力・欲望の充足）を得ると再び猛威を振るい、人を滅ぼす。

●要約（あらすじ）

冬の厳しい寒さの山中で、
マールギール（蛇捕り）が蛇を捕まえようと探していると、
巨大な大蛇が凍って動かなくなっているのを見つける。
彼はこれを「死んだ」と勘違いし、縄で縛って
バグダード（イラクの温暖な地）に運び、
人々を驚かせて金儲けしようとする。

バグダードに着くと、好奇心旺盛な人々が大勢集まって見物する。
イラクの暖かい太陽の光が当たると、
凍っていた大蛇は徐々に解凍され、生き返る。
突然動き出した大蛇は、周囲の人々を襲い、多くの者を殺傷・破壊する。
マールギール自身もその災厄に巻き込まれ、物語は悲惨な結末を迎えることになる。

●寓話

〈マールギールと凍った蛇〉

蛇捕り人が凍った大蛇を死んだと思い、
縄で巻いてバグダードへ運んだ物語年代記者の語る物語に耳を傾けよ
この隠された神秘の片鱗を味わうために。

ある蛇捕り人が山へ行き、呪文を唱えて蛇を捕らえようとした。
遅かろうと速かろうと、求める者は必ず見出す。
常に両手で、全力で求めよ。
探求こそ、道における優れた導き手である。

跛で足を引きずり、背が曲がり、礼儀知らずであっても、
常に這い寄り、彼を求め続けよ。

時には言葉で、時には沈黙で、時には匂いで、

あらゆる方角から王の香りを嗅ぎ取れ。

ヤコブは息子たちに言った、「ヨセフを限界を超えて探せ。
この探求に、全ての感覚を四方八方へ、真剣に振り向けよ。
失われた子を捜す者のように、
神の息吹（慈悲）を決して絶望するな。
口の感覚で尋ね、求めるものの四つの道に耳を当てよ。

甘い香りが来たら、その方角へ嗅げ。
その方角を、お前たちは知っているのだから。
誰かから親切を感じたら、
その親切の源へと辿り着く道があるかもしれない。

これらすべての美しいものは、深い海から来る。
部分を捨てよ、全に目を向けよ。

人々の戦いは美のためにあり、
飾らぬ者の飾りはトゥーバーの木のしるしである。

※トゥーバー
［訳註：イスラムの伝承における
「楽園（天国）にある聖なる樹」のこと］

人々の怒りは平和のため、
落ち着きのなさは常に安らぎの罠である。
あらゆる打撃は愛情のため、
あらゆる不平は、受けた恵みへの感謝を気づかせる。

部分から全体へ嗅ぎ分けよ、気高き者よ。
反対から反対へ嗅ぎ分けよ、賢き者よ。

確かに戦いは平和をもたらす。
蛇捕り人は、友情のために蛇を求めた。
人は蛇を友情のために求め、
自分を顧みない者に心を配る。

蛇捕り人は雪の季節に、山々を巡って大きな蛇を探していた。
そこで彼は、巨大な死んだ竜を見つけた。
その姿を見て、心は恐怖で満たされた。

厳しい冬に蛇を探していた蛇捕り人は、
死んだ竜を見つけた。
蛇捕り人は人々を驚かせるために蛇を捕らえる――
見よ、人々の愚かさを！

人は山である、どうして誘惑されることがあろうか。
山が蛇に驚くなど、どうしてありえよう。

哀れな人は自分を知らない。
高い位から来て、低きに落ちたのだ。
人は自分を安く売った。
絹であったのに、ぼろ布に縫い付けてしまった。

数十万の蛇と山々が彼に驚いているというのに、
なぜ彼は蛇に魅了され、夢中になるのか。

蛇捕り人はその蛇を抱え上げ、
人々を驚かせるためにバグダードへやって来た。
わずかな報酬を求めて、家のような太い柱のような竜を運んだ。

「死んだ竜を連れて来た。
狩るのにどれほど苦労したことか」と言いながら。

彼はそれが死んでいると思ったが、
生きていた。ただ、よく見えていなかっただけだ。

霜と雪で凍っていたのだ。
生きていたが、死んだように見えた。

この世界は凍っている。その名は「ジャマード」。
「ジャーミド」とは「凍った」という意味だ、師よ。

復活の太陽が現れるまで待て。
そうすれば、世界の体の動きを見るだろう。

ここでモーセの杖が蛇になった時、
知性は、無生物たちに関する情報を与えられた。

神が汝の土くれを人間にしたのだから、
土の粒子すべての本質を認識せよ。

ある視点からは死んでおり、別の視点からは生きている。
ここでは沈黙し、あちらでは語る。

神が彼らをあちらから我らの方へ送るとき、
杖は我らに対して竜となる。
山々もダビデのように歌い、
鉄の物質は手の中で蝋のようになる。

風はスライマーン（ソロモン）の運び手となり、
海はモーセの言葉を理解するようになる。

月はアフマド（ムハンマド）の命令に従ってしるしを見、
火はイブラーヒーム（アブラハム）のために野バラとなる。

大地はカールーン（コロ）を蛇のように飲み込み、

嘆きの柱は正しさの道に入る。

※カールーン
［訳註：莫大な富を持ちながら
傲慢であったために滅ぼされた人物」の代名詞］

石はアフマドに挨拶し、
山はヤヒヤー（ヨハネ）にメッセージを送る。

彼らは言う、「我々には聴覚と視覚があり、幸福である。
ただし、汝ら未熟者に対しては、我々は黙している」と。

汝らが無生物性（現世性）に向かっている限り、
どうして無生物たちの霊的な生命に親しむことができようか。

無生物性から霊の世界へ出よ。
世界の粒子の大きな音に耳を傾けよ。

無生物たちによる神の讃美が、汝に明らかになるだろう。
誤った解釈の疑いは、汝を真理から遠ざけない。

汝の魂に、視るための灯（光）がないからこそ、
解釈を作り出したのだ。

「目に見える讃美が、どうして意図された意味であろうか。
それを見るという主張は、誤った幻想だ」と。

いや、その（無生物）を見ることは、見る者に神を讃美させる。
その本質を考える時である。

だからこそ、それは汝に讃美を思い起こさせる。
その示唆は、まさにそれ自身が讃美の言葉を語ることと同じである。

これはムウタジラ派と、直接的な神秘的直観の光を持たない者たちの解釈である。

※ムウタジラ派
［訳註：8世紀半ばに誕生した
イスラム教の理知的・合理主義的な神学派のこと］

感覚の世界から逃れていない者は、
見えざる世界の理念に対して異邦人である。

この語りは終わらない。

蛇捕り人は百の苦労を重ねて蛇を運び、
ついにバグダードに着いた。
十字路で公開の見世物を開くために。

彼はティグリス川のほとりに見世物を設け、
バグダードの町に大騒ぎが起きた――
「蛇捕り人が竜を連れて来た。
稀に見る不思議な獣を捕らえた」と。

何万もの愚か者たちが集まった。
彼は彼らを餌食にし、彼自身も愚かさによってそれに餌食となっていた。

人々は竜を待っていた。彼もまた、散らばった人々が集まるのを待っていた。

群衆が多ければ多いほど、施しと寄付はよく集まる。
何万もの暇な饒舌者たちが集まり、
足の裏を突き合わせて輪を作った。

男は女を顧みなかった。
群衆のため、彼らは復活の日の貴族と平民のように混じり合っていた。

彼（蛇捕り人）が布（竜を覆う布）を動かし始めた時、
群衆の人々は首を伸ばした。

激しい寒さで凍っていた竜は、
百種類もの粗い毛織物の布と掛け布の下にあった。

彼はそれを太い縄でしっかりと縛っていた。
注意深い番人は、最大の用心をしていた。

期待と集まりの間の時間の間、
イラクの太陽が蛇に照りつけた。

熱い国の太陽がそれを温めた。
冷たい体液がその肢体から去った。

死んでいたものが蘇った。
太陽の熱を感じて驚き、大蛇は身をほどき始めた。

その死んだ蛇の動きによって、
人々の驚きは十万倍に膨れ上がった。

驚愕のうちに彼らは叫び声を上げ、
その動きから一斉に逃げ出した。

大蛇は縄を破り始め、
人々の大声の叫びとともに、縄はあちこちでパチパチと音を立てて切れた。

縄を破り、下から滑り出た――
恐ろしい大蛇が、ライオンのように咆哮しながら。

逃げ惑う中で多くの人が死んだ。

倒れた死者は百の山となった。

蛇捕り人はその場で恐怖に麻痺し、叫んだ。
「山と荒野から、何を持ってきてしまったのだ！」

盲目の羊が狼を目覚めさせた。
知らず知らずのうちに、自分のアズラーイール（死の天使）に向かって行ったのだ。

大蛇はその愚か者を一口で飲み込んだ。
血を飲むことは、ハッジャージュにとっては容易いことだ。

※ハッジャージュ
［訳註：イスラーム史において
主にウマイヤ朝の強力な政治家・軍人である
ハッジャージュ・ブン・ユースフ（661年 - 714年）のこと］

大蛇は柱に巻きつき、飲み込んだ男の骨を噛み砕いた。

この大蛇こそ、汝の官能的な魂である。
どうして死んでいるなどと言えようか。
それはただ、悲しみと手段の欠如によって凍っているだけだ。

もしファラオの手段を得たら――
その命令でナイルの水が流れたというファラオの――
それなら大蛇はファラオのように振る舞い始め、
百人のモーセとアーロンを待ち伏せするだろう。

貧しさの圧力の下では、あの大蛇は小さな虫に過ぎない。
しかし、力と富があれば、蚊は鷹となる。

汝の大蛇を、分離の雪の中に留め置け。
気をつけよ、それをイラクの太陽の下へ運んではならない。

汝の大蛇が凍ったままである限りは良い。
しかし、解放されたら、汝はそれの一口となる。

それを殺せ、そして霊的な死から安全になれ。
慈悲をかけるな。それは慈悲に値する者ではない。

快楽の太陽の熱がそれに当たれば、
汝の卑しいコウモリは翼をばたつかせるだろう。

男らしく、それを霊的な戦いと戦場へ導け。
神は汝に近づきの報酬を与えよう。

その男が大蛇を熱い空気の中に連れて来た時、
傲慢な獣は回復した。

必然的に、それはあの惨事を引き起こした。
親愛なる友よ、語ったものの二十倍もの惨事を。

暴力を用いずに、それを静かに忠実に縛り続けることを、
汝は望むのか。

この望みが、どんな卑しい者にも叶うだろうか。
それには、大蛇を殺すモーセが必要だ。

その大蛇によって、数十万の人々が逃げ惑う中で殺された。
まさに彼が企てた通りに。

■詩集『マスナヴィー』

⑨「悪人のために祈った説教者」（第四巻より）

「葦の歌」「八百屋と鸚鵡の物語」
「老いた楽師の物語」「ぶどうをめぐる四人の争い」
「新月を見たと思い込んだ者」「スーフィーのロバ」
「暗闇の中の象」「マールギールと凍った蛇」に続き、
第４巻から「悪人のために祈った説教者」

●寓話の基本的な視点

表面的な「悪」（苦痛・敵・災い）は、
霊的成長の手段・薬・導き手である。

●要点

説教者（ヴァーイェズ）が説教壇（ミンバル）に上がるたび、
悪人・腐敗者・横暴な者たちに慈悲をと祈り、
善人や純粋な者たちのためには祈らない。

人々は不思議がり
「なぜ悪人たちに祈るのか？」と尋ねると、
説教者はこう答える。

悪人たちは、その悪事・不正・抑圧で、
悪（世俗）から善（神の道）へ追いやってくれる。
悪に向かおうとすると、彼らから打撃を受け、
痛みで神の方向へ逃げ帰るようになる。
狼（悪人）が自分を正しい道へ連れ戻してくれたようなもの。

むしろ、恵み（安楽）はあなたを神の門から遠ざける。
真の敵（災い）は実は薬（キミヤー＝錬金術の霊薬）。
孤独に追いやって神の助けを求めるきっかけになる。
友（安楽を与える者）は実は敵。
神の臨在から遠ざける。

●本文（意訳）

〈悪人のために祈った説教者〉

説教者の物語――
毎回の説教の冒頭に、
不義の者・冷酷な者・不信心な者のために祈る者

説教壇に上るたび、
ある説教者は祈りを始めた。
道を荒らす盗賊らのために、

正しき者を虐げる者らのために。

手を高く挙げて叫ぶ――
「主よ、悪しき者どもに慈悲を、
腐敗させる者、傲慢な罪人に、
善人を嘲る者すべてに、
心に不信を抱く者すべてに、
キリストの修道院に住む者らに。」

清らかな者のためには祈らず、
ただ悪しき者らのためだけに祈る。

人々が言った。「これは奇妙だ。
不義の者どものために祈るなど、
慈悲とは言えぬ。」

彼は答えた。「私はこの者らから善を見た。
ゆえに、彼らのために祈るのだ。
彼らはあまりに多くの悪と不義と圧政をなした。
そのゆえに私を悪から善へと追いやった。

この世に向かって顔を向けるとき、
私は彼らから打擲と殴打を受けた。
その打擲から逃れて、あの世に避難所を求めた。
狼どもはいつも私を正しい道へと連れ戻した。
彼らが私の霊的幸福の手段を用意してくれたのだから、
知恵ある者よ、私は彼らのために祈るべきである。」

神の僕が、神に痛みと苦しみを訴える。
その痛みについて百の不平を述べる。

神は言う。「それでも、悲しみと痛みは
お前を謙虚にし、祈る者にし、正しき者にしたではないか。
その恵みのことをこそ訴えよ――
お前を私の扉から遠ざけ、
追放者とするその恵みを。」

実に、すべての敵は汝の薬である。
霊薬であり、利益であり、汝の心を求めんとする者。
汝はその者から逃れて孤独に入り、
ただ神の恩寵を乞うようになる。
汝の友こそ真の敵である――
彼らは汝を神の御前から遠ざけ、
彼ら自身のなかに閉じさせるから。

一つの動物がいる。
その名を「ヤマアラシ（ushghur）」と言う。
棒の打擲によって太く大きくなる。

打てば打つほどますます栄え、
棒の打擲によって肥え太る。

まことに、真の信者の魂はヤマアラシである。
苦難の打擲によって太く肥える。

ゆえに、預言者たちに下された試練と屈辱は、
世のすべての被造物より大きい。
彼らの魂は他のすべての魂より逞しくなった。
他のどんな人々も、あのような苦しみを受けなかったから。

皮は薬液（なめし液）によって苦しめられるが、
ターイフの革のように甘く美しくなる。
もし鞣し職人が苦く刺激の強い液を擦り込まなければ、
それは腐臭を放ち、不快で汚らわしいままになる。

知れ、人間はなめしを施されぬ生皮である。
体液によって臭く、粗野である。

苦く刺激の強い戒めと、
多くの擦り込み（試練）を与えよ。
そうすれば清らかで美しく、極めて強くなる。

もし自らを抑制できぬなら、
狡猾なる者よ、満足せよ。
神が自ら、汝の選択なく試練を与えてくださるならば。

友からの試練は、汝を清める手段である。
神の御知は、汝の策略を超えている。

試練は、幸福を見る者に甘くなる。
薬は、健康を思う病人に甘くなる。

彼は詰みの本質の中に自らの勝利を見る。
ゆえに言う――「私を殺せ、信頼する者たちよ！」

この警吏は、他者にとっては利益となったが、
自分自身にとっては堕落した。

信仰に属する慈悲は彼から断たれた。
悪魔に固有の憎悪が彼を包んだ。

彼は怒りと憎しみの工場となった。
知れ、憎しみは迷いと不信の根である。

■詩集『マスナヴィー』

⑩「染色桶に落ちたジャッカル、孔雀を装うこと」（第四巻より）

「葦の歌」「八百屋と鸚鵡の物語」
「老いた楽師の物語」「ぶどうをめぐる四人の争い」
「新月を見たと思い込んだ者」「スーフィーのロバ」
「暗闇の中の象」「マールギールと凍った蛇」
「悪人のために祈った説教者」に続き、
第４巻から「染色桶に落ちたジャッカル、孔雀を装うこと」

●寓話の基本的な視点

染色桶に落ちて色とりどりの毛皮をまとったジャッカルが、
自分を「天上の孔雀」だと偽り、驕り高ぶる様子が描かれる。
精神的な熱狂を持たず、外面や言葉だけで人を欺く偽物を、
ルーミーが風刺した寓話。

ルーミーはこの寓話を通じて、「外見だけの修行」と
「本物の精神的変容」の違いを鋭く批判している。

●要点

1.「色の変化」は「心の変化」ではない

ジャッカルが染色桶に浸かって色が変わったのは、
単なる外面の装飾に過ぎない。

・メタファー:
宗教的な衣類を身にまとったり、難しい言葉を並べ立てたりすることで、
あたかも自分が悟りを開いたかのように振る舞う
「偽の指導者」や「形だけの修行者」を指している。

・教訓:
真の変容は「魂の洗濯（内面的な浄化）」によって起こるものであり、
外側から色を塗る（外面を整える）ことでは得られない。

2.「孔雀」というプライド

孔雀は美しさの象徴だが、ジャッカルは本質的にはジャッカルのまま。

・メタファー:
ジャッカルが自分を「天上の孔雀」と呼んだのは、
精神的なプライド（傲慢さ）の象徴。

・教訓:
偽の修行者は、人からの称賛を求め、高い場所（説教壇）に立ちたがる。
しかし、その根底にあるのは「神への愛」ではなく「自己愛」である。

3.「熱狂（Ardour）」の欠如

詩の後半で仲間が指摘した「熱狂（霊的な情熱）」の不在が、
決定的な違いとして描かれている。

・メタファー:
聖者や預言者が持つ「熱狂」は、
内側から溢れ出す本物の火のようなエネルギー。
一方で、偽物の「厚かましさ」は、内面の空虚さを隠すための盾に過ぎない。

・教訓:
人を欺くことはできても、
自分自身の魂が感じている「不幸（虚しさ）」までは隠せない。

●本文（意訳）

〈染色桶に落ちたジャッカル、孔雀を装うこと〉

一匹のジャッカルが　染色桶に落ち
しばしののち　そこから這い上がった
その身には　色とりどりの模様がつき
「私は天上の孔雀となった」と　彼は宣（のたま）う

染まった毛皮は　妖艶な輝きを放ち
陽の光を浴びて　さんざめく
緑、赤、斑（まだら）に　そして黄色
己の姿に見惚れ　仲間の前に躍り出た

仲間は問うた
「小さなジャッカルよ　どうしたというのだ
なぜそれほどまでに　悦びに満ちている？
我らを蔑み　背を向けるとは
その傲慢さは　一体どこから持ってきたのか」

一匹のジャッカルが　彼に歩み寄り言った
「おい、お前さん　これはただの欺きか
それとも真に　神に心躍る者となったのか？

お前はただ　説教壇に飛び上がり
口先三寸で　民を後悔させたいだけではないか
懸命に努めてはみたが　霊的な熱狂など微塵もない
ゆえに欺瞞をもって　厚かましさを晒しているのだ」

聖者や預言者にこそ　魂の熱狂は宿り
偽り者の隠れ家は　常にその厚顔にある
彼らは「神と共にあり幸せだ」と　人目を引くが
その心のうちは　この上なく不幸なのだ

■詩集『マスナヴィー』

⑪「師を盲目的に真似た弟子」　「二度笑う耳の聞こえぬ男」（第五巻より）

第５巻から
「師を盲目的に真似た弟子」
「二度笑う耳の聞こえぬ男」

●寓話の基本的な視点

「聖者や師の外面的な振る舞いをただ真似るだけで満足するな。
その背後にある霊的な実在を自ら味わい、理解せよ。」

盲目的模倣（タクリード：taqlīd）」と
「本物の実現・検証（タハキーク：tahqīq）」の対比を描く。

●物語のあらすじ

無知な若者が、徳高い人々が集まる説法の場に入る。
そこで聖なる長老（シャイフ）が激しく泣きながら説法しているのを見て、
若者は何も理解していないまま、ただ盲目的にその泣き真似をする。
説法の内容は全く分かっていない。
説法が終わると、若者は長老に一礼して立ち去る。
これを見た長老の真の弟子の一人が、
師の誉れを守るために若者を追いかけ、厳しく諭す。

さらに「二度笑う耳の聞こえぬ男」の譬えを語る。

耳の聞こえない男が、友人たちが大笑いしているのを見て、
自分も理由も分からず一緒に笑う（最初の笑い＝盲目的模倣）。
後で冗談の内容を説明され、初めて心から笑う（二度目の笑い＝真の理解）。
若者もまた、最初はただ模倣で泣いたが、
真の弟子になるためには、いつか「二度目の涙」（本物の理解と体験）を
流さなければならない。

●本文（意訳）

〈師を盲目的に真似た弟子〉

ある無知な若者が、
徳高い人々が集まる場所へ入っていくと
聖なる長老（シャイフ）が説法をしているところだった。
若者は、長老が激しく涙を流しているのを目にした。
すると若者は、ただ盲目的に、分別のない模倣から、
長老の振る舞いをそっくり真似て、
自分も同じように激しく涙を流した。
説法の言葉など、一言も理解していないのにもかかわらず。

それはまるで、周囲の者が笑うのを見て
、何が面白いのかも分からず、
ただ愛想笑いをする耳の聞こえない男のようだった。
男は、その冗談の本質を説明してもらい、真に理解して初めて、
もう一度心から笑うことができるのだ。

若者はこのように無知なまましばらく涙を流した後、
長老に深く一礼をして、その場を立ち去った。
しかし、長老の真の弟子のひとりが、
我が師の誉れを守るために
若者の後を追いかけ、このように語りかけた。

「アッラーに誓って言うが、
外で『長老が泣くのを見たから、私も同じように泣いた』
などと言い触らしてはならない。

お前の無知でただ真似事だけの涙は、
あの聖者の涙とは全く異なるものだ。

あのような涙は、師と同じように、
30年ものあいだ霊的な戦いを戦い抜いた者にしか流せない。

師の涙は世俗の悲しみによるものではなく、
の深い関わりから湧き出ているのだ。
お前の理性や五感では、師の開かれた清らかな視界に映る
霊的な神秘を捉えることはできない。

それは暗闇が光を見ることができないのと同じだ。
師の息吹は預言者イーサー（イエス）のようであり、
世俗の憂いによる人間のため息とは違う。

師の涙も、微笑みも、言葉も、師自身のものではなく、
アッラーから湧き出ているのだ。

お前のような愚者は、聖者の行動の動機や意図を知らない。
だから、その意味を理解せぬまま真似をしようとすれば、
ただ己を傷つけるだけなのだ」

〈二度笑う耳の聞こえぬ男〉

友が友へと冗談を語るとき
聞き耳を立てる耳の聞こえぬ男は、二度笑う

一度目は、模倣と愚かさから
一座の誰もが笑うのを見て

皆と同じように笑ってはいても
そのとき男は、笑いの理由を知らない

やがて男は、何がそんなに面白いのかと尋
ねそれを聞いて初めて、二度目の笑い声をあげる

それゆえ、盲目的な模倣者とは耳の聞こえぬ男のようだ
自分が感じた振りをしている、その喜びにおいて

光は長老のものであり、泉も長老のもの
溢れ出る喜びもまた長老のもので、男のものではない

それは器の中の水、あるいはガラスを通した光のよう
もしそれらが「己から湧き出た」と思うなら、それは誤りだ

器が泉を離れたとき、器は自らの過ちに気づく
内にある水が、泉から注がれたものだったと知るのだ

ガラスもまた、月が沈むときに悟る
自らの輝きが、月の光によるものだったと

「立ち上がれ！」との命によって、その目が開かれるとき
その弟子は、夜明けのように、二度目の微笑みを浮かべる

そして、かつて盲目的な模倣のあまり
自分を追い越していった、あの最初の笑いを、自ら笑い飛ばすのだ

■詩集『マスナヴィー』

⑫「香油と麝香の匂いに気絶した革なめし職人の物語」（第四巻より）

第４巻から「香油と麝香の匂いに気絶した革なめし職人の物語」。

●寓話の基本的な視点

物質的な欲望や俗世の習慣が
霊的な香り（神の美・純粋さ）を拒否する人間の状態を、
ユーモラスかつ象徴的に描いている。

●物語のあらすじ

・革なめし職人が香料商人の市場に入った途端、
香水や麝香の強い良い匂いを嗅いで気絶し、倒れてしまう。

・周囲の人々が集まり、心配して様々な治療を試みる。

・しかし、どれも効果がなく、職人はますます苦しむ。

・そこへ別の皮なめし職人（または賢い人物）が現れ、
「これは香りのせいだ」と気づき、
慣れ親しんだ犬の糞を少し持ってきて、気絶した職人の鼻元に近づける。
すると、職人はその「慣れた悪臭」で正気を取り戻し、回復する。

●象徴的・教訓的な意味

・革なめし職人の仕事：
皮をなめすために糞や汚物、刺激の強い液体を使う。
俗世の欲望・習慣・物質的な「汚れ」に慣れ親しんだ人間の象徴。

・香水・麝香・バラ水：
霊的な純粋さ、神の美、神秘的な香り
（スーフィズムの神への愛や悟り）を表す。
俗世に染まった者には逆に毒や苦痛になる。

・糞・汚物：
俗世の習慣や低俗な快楽。
慣れ親しんだ環境に戻ることで
一時的に「回復」するが、それは本当の癒しではない。

・示唆されている視点

俗世に慣れた者は、純粋な霊的香りに耐えられない。
真の進歩のためには、欲望の世界を離れ、
浴場（浄化・神への道）へ進む必要がある。
霊的指導者は、病人に合った「薬」

（時には厳しいものや、慣れたものから始める）を処方する。
人は習慣の奴隷になりやすい。
糞虫がバラ水で気絶するように、
悪い習慣に染まった者は善いものを拒む。

ルーミーはこのような日常的な寓話を用いて、
霊的変容の必要性、習慣の力、真の癒しは
内面的な浄化にあることを説く。

●本文（意訳）

〈香油と麝香の匂いに気絶した革なめし職人の物語〉

ある男が 香具師たちのバザールへ
足を踏み入れた途端に 意識を失い 崩れ落ちた
気高き調香師たちから 漂う香油の匂いが
彼の頭を狂わせ その場に 卒倒させたのだ
真昼の往来のただ中に 彼は倒れた
まるで 魂の抜けた 屍のように

人々は 彼を取り囲み 「神のほかに力なし」と唱え
あれこれと 救護の手を 施しはじめた
ある者は 彼の胸に手を当て 鼓動を確かめ
別の者は 清らかな 薔薇水を 振りかけた
まさか その芳しき薔薇水こそが 苦しみの元凶だとは
その場にいる 誰も 知る由がなかった

ある者は 手や頭を もみほぐし
別の者は 冷却のための 泥と藁を 運んでくる
ある者は アロエの香木と砂糖の 薫香を焚き
別の者は 彼の衣服を 緩めてゆく
ある者は 脈拍を測り 鼓動を確かめ
別の者は 彼の口の匂いを 嗅ぎまわる
酒を飲んだのか 大麻やハシシを 喰らったのか
あらゆる手を尽くしても 目覚めぬ男に 人々は絶望した

急報は すぐさま 彼の親族へと届けられた
「誰それが 往来の真ん中で 倒れているなぜ
昏睡に陥ったのか 誰もわからない
人目にさらされ 憐れな姿に なっている」

その頑強な革なめし職人には 弟がいた
悪知恵が働き 機転の利く その弟は
知らせを聞くや 猛スピードで 駆けつけた

袖の中に わずかな「犬の糞」を忍ばせ
嘆きの声をあげながら 群衆をかき分け 兄へと近づく
「兄の病の原因は わかっている」と 彼は言った

「原因さえわかれば 治療の道は 明らかなのだ」

「原因がわからねば 治療は困難を極める
百もの的外れな 憶測に 惑わされるからだ
だが 原因を突き止めれば 解決はたやすい
原因を知ることこそ 無知を 追い払う道なのだ」

弟は 心の中で ひとりごちた
「あの犬の糞の匂いこそ 兄の脳と血管に 染み込んでいる
毎日 夜が更けるまで 肥溜めに腰まで浸かり
皮をなめして 生計を立ててきたのだから」

大いなる医師 ガレノスも かつてこう言った
「病者には それまで 慣れ親しんだものを 与えよ
病とは 日常の習慣に 反することから 生じる
ゆえに 癒やしは 慣れ親しんだものの中に 求めよ」

糞を運び続けた兄は まるで フンコロガシだ
フンコロガシは 薔薇水を浴びれば 気絶してしまう
彼を救う薬は 慣れ親しみ 馴染んできた
あの犬の糞の匂い 以外に ないのだ

唱えよ 「悪毒なる女は 悪毒なる男にふさわしい」と
この格言の 表と裏を よく見極めるがよい
誠実なる導き手が 龍涎香や薔薇水で
（神の慈悲の）扉を開こうと 薬を調合しても
悪しき者たちに 甘き言葉は 通じない
それは 彼らには似合わぬのだ おお、誠実なる者たちよ！

聖なる啓示の 香り（真理）に触れたとき
（不信仰な）悪しき者たちは 心を歪ませ 迷い
「お前たちのせいで 災いがもたらされた」と 嘆き叫ぶ
「お前たちの言葉は 我らにとって 病であり 苦痛だ
その説教は 我らにとって 不吉な予兆でしかない」

「もし これ以上 表立って 我らを戒めるならば
その瞬間に お前たちを 石打ちにしてくれる
我らは くだらぬ娯楽と気晴らしで 太ってきたのだ
自己を戒める教えなど 浴びたことはない
我らの糧は 偽りと 虚栄と 冗談なのだ
お前たちのメッセージは 我らの胃を ひっくり返す」

「お前たちは 病を 百倍にも 膨らませている
お前たちの説教は 我らの知性を 麻痺させる 阿片だ」

若者は 人々を 兄から 遠ざけ続けた
その奇妙な 治療の処方を見られぬように

彼は 秘密を囁くかのように 兄の耳元へ顔を寄せ
手のひらの「あるもの」を その鼻先へと 押し当てた
手のひらに すり込んでおいた 犬の糞
汚れきった脳を 覚醒させる 唯一の薬を

わずかな時が流れ 男の身体が 動き出した
人々は 驚嘆し 「なんと見事な 呪文（まじない）か！」と叫んだ
「あの若者が 耳元で 呪文を唱え 息を吹きかけたのだ
死んでいた男が 呪文の力で 蘇った！」

だが 悪徳に染まりし者の 魂の向かう先は
いつだって 淫行と 秋波（色目）と 眉の動く 卑俗な場所なのだ

「戒め」という名の 麝香の香りが 効かぬ者は
必然的に 悪臭の中に 身を置くことになる

神が 多神教徒を「ナジャス（不浄）」と呼ばれたのは
彼らが はじめから 糞の中で 生まれてきたからだ
糞の中で 生まれた 蛆）は
龍涎香の香りを浴びても その邪悪な本性を 変えはしない

注がれる 神の光（恩寵）が 届かなかった悪しき者は
心（霊魂）を持たぬ ただの肉体であり 空っぽの「もみがら」だ

だが もしも 神が その光を ひとさじでも 与えたなら
エジプトの（人工孵化の）ように 糞の中から 鳥が還るだろう
それは 安価な 家畜の鶏などではなく
「知識」と「知恵」という名の 聖なる鳥なのだ

「お前は あの（不信仰な）者に 酷似している
その光を 欠いているからこそ 汚物に鼻を近づけるのだ

私から 離れてしまったがゆえに お前の頬は 青ざめ
お前は 黄ばんだ葉をつけ 熟さぬ実を宿す 木のようだ

鍋は 火に黒焦げにされ 煙のような色に なったというのに
中にある肉は 固く 依然として 生焼きのままである！

お前を私から 引き離し 八年もの間 煮込んできたというのに
お前の生臭さと 偽善は 塵ひとつぶんも 減りはしなかった

お前の若き葡萄は 固く 閉ざされたままだ
病（試練）を経て 他の葡萄は
すでに 干し葡萄へと 熟したというのに
お前だけが 未だに 熟さぬまま 渋みを残している」

■詩集『マスナヴィー』

⑬「賢者と孔雀」（第五巻より）

第５巻から「賢者と孔雀」。

●寓話の基本的な視点

賢者が自らの羽をむしるクジャクを止める物語を通じ、
才能や富（羽）を排除するのではなく、
誘惑を抱えたまま欲望に打ち勝つ
精神的葛藤（聖なる戦い）こそが真の徳であると説く寓話。

この教えは、能力を保持したまま
執着だけを切り離す精神的成長を強調しており、
物理的な自傷行為や欲望からの逃避を否定している。

●物語のあらすじ

クジャクが美しい羽のために猟師に命を狙われ、
その美しさを自らむしり取って身を守ろうとする物語。
賢者はこれを人間の才能や富が魂を危険にさらすことの比喩とし、
欲望を排除するのではなく克服することに真の美徳があると説く。

●本文（意訳）

〈賢者と孔雀〉

ある賢者が畑を耕しに出かけると
一羽のクジャクが自らのくちばしで
美しい羽をむしり取っていた

その愚かな自傷行為を見かねた賢者は思わず叫んだ
「やめなさい！なぜそんな風に自らを傷つけ
その美しさを無駄に壊してしまうのか」

クジャクは答えた
「あなたが称えるこの美しい羽こそが
哀れな私を危険にさらす原因なのです
私は猟師に追われ続けていますが
立ち向かう力はありません
だからこのくちばしで羽を毟（むし）り取り
醜い姿になろうと決めたのです
そうすれば、もう猟師も私を狙わないでしょう」

〈孔雀の羽を毟るな〉

その羽をむしり取るな

二度と元には戻らない

おおいなる美しき者よ
いたずらにその顔を汚すな

その顔は、午前（ひるま）の太陽のように輝く
それを損なうのは、あまりに深い罪だ

その顔を傷つけるのは、信仰に背くこと
月さえも、それを見失えば涙を流すだろう

お前は自らの美しさを知らないのか
己と戦うその心を、今すぐ捨て去るがいい

お前の穏やかな魂の顔を傷つけるのは
お前自身の、愚かな思考の爪なのだ

その思考は、毒を帯びた爪だと知りなさい
魂の顔に、深い傷を刻みつける爪なのだ

羽をむしり取るな、ただそこから心を離せ
この聖なる戦いの法とは、欲望との対峙にある

もし対峙がなければ、戦いなどあり得ない
情欲がなければ、法への従順もあり得ない
肉の欲がなければ、禁欲もあり得ないのだ……

（詩人は語る。
この世の賢さや才能、富は、
クジャクの羽のように人間の霊的な命を危険にさらす。
しかし、それらは私たちに与えられた「試練」なのだ。
試練がなければ、徳が生まれることもない。）

■詩集『マスナヴィー』

⑭「アレッポの詩人の叱責」（第六巻より）

第６巻から「アレッポの詩人の叱責」。
（アレッポの詩人の物語、または
アーシューラーのシーア派の嘆きを巡る詩人の出会い）

●寓話の基本的な視点

形式的な宗教儀礼や外面的な嘆きを批判し、
魂の真の目覚め・内面的な覚醒・神（真実）への
生きた理解を説く。

・外形式 vs. 内実

宗教の「形式」は重要だが、それ自体が目的ではない。
真の信仰は魂の目覚めと生きた体験にある。

・死と生の逆転

肉体的な死は真の王者（聖者）にとっては解放・歓喜。
逆に、霊的に眠っているこの世の生こそ本当の死である。

・自己を悼め

他者の過去の悲劇を大げさに嘆く前に、
自分の腐った心・無知・神から離れた状態を悔い、目覚めよ。

・愛と知識の証

真に神（大海）を知った者は、
幸福の顔を持ち、施し（愛の行動）をする。
知識は行為と一体である。

・普遍性

特定の宗派を直接攻撃するより、
すべての形式宗教に潜む「眠り」を戒める
普遍的な視点でのスーフィー的メッセージである。

●物語のあらすじ

アーシューラーの日（イスラーム暦ムハッラム月10日）。
シリアのアレッポで、人々がアンティオキアの門に集まり、
カルバラーの悲劇（680年、フサインと聖家族が
ヤズィード軍により虐殺された事件）を悼み、

ヤズィードやシムルの残虐を嘆き、涙と叫びで一日を過ごす。

旅の異邦人である詩人が通りかかり、
群衆の激しい嘆きを見て興味を持ち、
「これは誰の死を悼むのか？高貴な人物だろう。
名を教えてくれ、私が立派な哀悼歌を作って旅の糧にしよう」
と尋ねる。

民の一人が嘲り、
「お前はシーア派ではないのか？これは軽々しいことではない。
一人の魂（フサイン）のための嘆きは、ノアの洪水百回より尊い」
と答える。

詩人は静かに、しかし鋭く返す。

事件は数百年前に起きたのに、
今頃になって大げさに嘆くとは遅すぎる。
むしろ自分自身の眠れる魂を悼め。
この世に囚われ、霊的世界を見ていない「重い眠り（死）」を嘆け。

聖者（真の宗教の王者）たちは肉体の牢獄から解放され、
歓喜すべき時なのに、なぜ衣を裂いて悲しむのか。
真の知識があるなら、外面的形式の嘆きではなく、
内面的な目覚め・神への生きた献身・霊的世界の見識を持て。
腐った心・この世しか見えない信仰を悔いよ。

大海（神の恵み）を見たのに、
なぜ施しや幸福の顔がないのか？
川を見た者でさえ水を惜しまないのに･･･。

●本文（意訳）

〈アレッポの詩人の叱責〉

アーシューラーの日、アレッポの民は
アンティオキアの門に集い、
男も女も、老若男女、
夕闇まで泣き叫ぶ。

カルバラーの悲しみを、
ヤズィードとシムルの残虐を、
聖なる家族の受難を、
涙と嗚咽とで繰り返す。
叫びは野を埋め、砂漠を震わせ、
天にまで届くかのようだった。

そこへ旅の詩人が、

道からやって来た。
異邦の者、物珍しげに耳を傾け、
やがて門の外へと足を向けた。

「これは何事か？
誰の死を悼むのか？
なんと大勢の群衆よ！
さぞかし高貴な御方であろう。
名と位と人柄を教えてくれ。
私は詩人、立派な哀悼歌を作ろう。
それを持って、旅の糧を得よう。」

民の一人が嘲るように言った。
「気でも狂ったか、異邦人よ。
お前はシーアの徒ではないな。
聖家族の敵か。

アーシューラーは一人の魂のための嘆き、
その魂は一世代より尊い。
真の信者にとって、この悲しみは軽々しくない。
耳への愛は、耳輪への愛と同じ。
ノアの洪水百回よりも、
あの清らかな霊の悼みは尊いのだ。」

詩人は静かに、しかし鋭く答えた。

「されど、ヤズィードの時代はいつか？
この悲劇はいつ起きたのか？
その報せがここに届くのに、
なんと長い年月を要したことか。
盲人の目がその喪失を見、
聾者の耳がその物語を聞いたというに、
今頃になって衣を裂き、嘆くとは。

眠れる者たちよ、むしろ己を悼め。
この重い眠りは、悪しき死である。

王者の霊は牢獄を脱したのだ。
なぜ衣を裂き、手を噛むのか。
彼らは真の宗教の王者、
鎖を断ち切ったその時こそ、歓喜の刻だった。
帝国の天幕へと急ぎ、
枷と鎖を投げ捨てた。

今こそ彼らの王権と誇りと主権の日。
彼らについて一塵の知識ある者なら、知るはず。
もし知らぬなら、己を哭け。
来世の移り行きと、最後の集いを信じぬ者を。

己の腐った心と信仰を悼め。
この古びた大地以外、何も見えぬ心を。
もし霊の世界を見ているなら、
なぜ勇ましく、支え、身を捧げ、満ち足りぬのか。

真の宗教の酒による幸福が、
その顔になぜない？
大海を見たというのに、なぜ施しの手がない？
川を見た者でさえ、水を惜しまぬ。
ましてやあの海と雲を見た者は。」

こうして異邦の詩人は、
形式の嘆きを越え、
魂の真の目覚めを説いた。
アレッポの門に響く哭声は、
今もなお、眠れる者のための戒めとして、
ルーミーのマスナヴィに残る。

■詩集『マスナヴィー』

⑮「鳥と鳥刺し」（第六巻より）

●寓話の基本的な視点

甘い言葉や一見すると宗教的で善人に見える外見に騙され、
内なる警戒を怠ると、欲望の罠に囚われてしまうという、偽善への強い警告。

●物語のあらすじ

鳥刺しが、草や葉で自分の身を隠し、
じっと鳥を捕まえる罠を張っていた。
そこへ一羽の賢い鳥がやってきて、
なぜそんな奇妙な格好をして寂しい場所に隠れているのかを尋ねる。

鳥刺しは「私は世俗を捨てて砂漠で祈る修行者だ」と嘘をつき、
罠の餌を「これは孤児から預かった遺品だ」と偽る。
鳥はその言葉を信じて餌に近づき、罠にかかってしまう。

捕まった鳥は「お前の甘い言葉を信じた私が愚かだった。
外見だけの善人に騙されてはいけない」と嘆き、物語が締めくくられる。

●本文（意訳）

〈鳥と鳥刺し〉

草原に罠が仕掛けられていた。
穀粒が撒かれ、鳥刺しは草葉を身にまとい、
頭にはバラと赤いアネモネを載せ、
まるで草の塊のように身を潜めていた。

一羽の小鳥が近づいた。
用心深く跳ね回りながらも、
ついに男の傍らに寄り、尋ねた。

「おお、緑の衣をまとう者よ、
この荒野の獣たちの間に、
あなたは何者ですか？」

鳥刺しは答えた。
「私は世を捨てた修行者。
草とともにここに満足し、
死の定めを見て、禁欲と敬虔を道とした。
隣人の死が私に警告した。
最後に一人で残る身、
人と親しむべきではない。

墓に向かう顔を、
ただ一なる神に向けるがよい。
顎が縛られる時が来るなら、
今、多くを語るべきではあるまい。
金糸の袍も帯も、
最後には縫わぬ一枚の死衣のみ。
我らは大地に帰る。
なぜ移ろいやすい被造物に心を寄せるのか。」

鳥は静かに言い返した。
「御老人よ、隠遁は
ムハンマドの宗教にふさわしくありません。
預言者は修道を禁じました。
金曜礼拝、共同の祈り、
善を勧め悪を避け、
無礼な者にも耐え、
雲のように人々に恵みを与える――
それがイスラームの道です。
人々に益をもたらす者が最善。
石と土くれの間に交わるのは、
あなたが石でなければ、なぜですか？
慈悲の対象たる共同体の中に生きなさい。」

鳥刺しは嘲った。
「パンだけを求める者は驢馬に似る。
そのような者と交わることこそ、真の隠遁。
この世のすべては崩れ去る。
死んだものを求める者は死人と同じ。
本物の土くれは人を害さないが、
あの土くれどもからは十万の腐敗が生まれる。」

鳥はさらに言った。
「ジハードとは、まさにこのような盗賊が
道に潜む時にこそ行われる。
勇者は危険な道を進み、人を守り、戦う。
男らしさの根は、敵と出会う時にこそ現れる。
我らの宗教は剣と畏怖、
イーサーの宗教は洞窟と山であった。」

鳥刺しは答えた。
「力ある時は戦え。
力なき時は耐え、飛び去るがよい。」

鳥は言った。
「心の堅固さと友が必要。
友であれ、友は無数に得られる。
悪魔は狼、あなたはユースフ。
ヤアクーブの裾を離すな。

一匹の羊が群れを離れた時に狼は襲う。
スンナと共同体を離れる者は、
獣の棲む荒野で自らの血を飲む。
道はスンナ、仲間は共同体。
道と友なくして、落ちるのみ。」

議論は長く続いた。

やがて鳥は尋ねた。
「あの小麦は誰のものか？」
「孤児の預かり物だ。私は信頼されている。」

鳥は言った。
「私は飢え、苦しんでいる。
今は腐肉さえ許される。
どうか許しをいただき、食べたい。」

鳥刺しは言った。
「必要があれば許されるが、
必要なく食せば罪。
食べるなら、代償を保証せよ。」鳥は思い、しかし貪欲が勝った。
小麦を啄むやいなや、罠は落ちた。

鳥は嘆いた。
「これは、修行者の甘言を聞いた者の罰。
いや、孤児の財を貪った貪欲の罰だ。」

鳥は激しく泣き叫んだ。
罠も鳥刺しもその悲しみに震えた。

「心の矛盾に背は折れた。
愛する御方よ、わが頭に手を置いてください。
あなたの御手は奇跡。
影を離さぬで。
私は焦がれ、焦がれ、焦がれている。
あなたへの恋に、すべての眠りは去った。
Cypress もジャスミンも羨むほどに。
私は値しない者ですが、
一瞬だけ、苦しむ者を顧みてください。」

「無であった私に、なぜこれほどの門を開いたのか。
あなたの恵みは疥癬の大地を抱き、
感覚の十の真珠を胸に置かれた。
五つの外なる感覚と五つの内なる感覚。
死せる精液を人間とした。
あなたの祝福なき悔悟など、
悔悟の髭を笑うようなもの。
あなたは悔悟の髭をむしり取る。

悔悟は影、あなたは輝く月。」

「わが店と住まいを壊した御方よ、
心を掻き毟るあなたを、
どうして嘆かずにいられましょう。
あなたなくして生きる者などなく、
あなたの主権なくして奴隷は存在しない。
わが生命の源よ、わが生命を取ってください。
私は智慧と分別に飽きた。
狂気の技を愛する。」

ルーミーはここに言う。
貪欲は盲目、
必要の前にこそ、
「助けを求める者に応える御方よ」と叫べ。
バスラの破壊の前に泣け。
死の洪水の前に嘆け。
悪魔が財を奪った後に
「我、 refuge を求める」と叫ぶは愚か。
しかし、それでもなお叫べ。
遅かろうと早かろうと、
神は全能なり。

鳥よ、罠に落ちた汝は、
今、すべての魂の姿。
悔悟の駿馬に跨り、
盗まれた衣を取り戻せ。
一瞬で天に至るその駿馬を、
決して盗賊に奪われるな。

マスナヴィはかく語り続ける——
欲望の罠に落ちぬよう、
友と道を離れぬよう、
そして何より、
神の御手のみを求めよ、と。